

# 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所

アジア仏教社会福祉学術交流センター

2024 年度

年 報

第9号

2025 年 10 月 31 日

Shukutoku University

Asian Research Institute for International Social Work (ARIISW)

Asian Center for Buddhist Social Work Research Exchange (ACBsw)



# 目 次

巻頭言	所長 戸塚 法子	iii
寄稿	顧問 田宮 仁 / 顧問 石川 到覚	iv

## 【研究ノート】

### 「仏教とソーシャルワーク教育」

—仏教からの知見をソーシャルワーク教育にどう活かしていくか—	戸塚 法子	1
--------------------------------	-------	---

### 1970年代の国際ソーシャルワーク学校連盟国際会議録から学ぶ：

アジア国際社会福祉研究所の知見と重ねて	松尾 加奈	9
---------------------	-------	---

## 【活動報告】

### 1. 設 立

(1) アジア仏教社会福祉学术交流センター	17
-----------------------	----

(2) アジア国際社会福祉研究所	17
------------------	----

### 2. 人 員

### 3. 年間活動記録（時系列）

### 4. 会議（研究所内）

(1) アジア国際社会福祉研究所運営委員会	21
-----------------------	----

(2) 所員会議	21
----------	----

### 5. 出 張

### 6. 来訪者

### 7. 分野別活動

### 8. ビジティング・リサーチャー論博プログラム

### 9. 国際会議

### 10. 収集資料

### 11. 広 報

### 12. 経 費（予算・決算）

### 13. 資 料

(1) 出版物	46
---------	----

(2) 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所関係規程類	51
---------------------------	----



# 巻 頭 言

## 「幕間」が意味するもの

— Re・論活性化に向け、直面した分岐点において —

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所

所 長 戸 塚 法 子



アジア国際社会福祉研究所は今、いろいろな意味で難しい「岐路」にさしかかろうとしている。これまで、国際ソーシャルワーク研究と仏教ソーシャルワーク研究という2足の草鞋を履きながら、その2つを融合させるべくさまざまな挑戦を行ってきた。多くの時間を費やしてきた。しかし、世の中のソーシャルワークの潮流は、依然として西洋由来の知識・知見によって構成され、それに基づく実践スタイルが主流となっている。しかしそれらは、東洋由来の知識・知見も同様に咀嚼した結果としての「西洋由来」という選択ではない。

研究所はその名にあるように「国際」という視野を掲げつつ、他方でその位置する「アジア」という土壌のなかで育まれてきた知識や知見、そして実践経験に没入できる「場」に身をおきながら「研究」と向き合ってきた。そんな我々は、今後いかなる「一手」を打ち出していったら良いのだろうか。研究所は今、直面した難しい「岐路」を前に、さまざまに思いをめぐらせている。

そこで最近よく思う言葉に「間」という言葉がある。多くの意味あいを含む言葉であり、「ものどものあいだ」「一定の期間」「あいまの時間」「媒介・境界」「無言の時間」等々の意味をもつ。

今まさに、研究所は「岐路」の前にできた「間」にその身を委ねている。舞踊や演劇のジャンルにおいて、作品中に意識的におかれている「間(幕間)」は、それまでの経緯を知る観客から、「今後どうなっていくのだろう」と言う、良い具合の期待感をうまく醸成させている。「間」はまさに「何かへの通過点・転換点」であり、「ふさわしい着地点」への「助走期間」とも重なってくる言葉のように思われる。

約10年、研究所は斬新な挑戦に向け、休むことなく走り続けてきた。その意味で、今出来たこの「幕間」を、さらなる挑戦に向けた「間(幕間)」と捉えていくことも出来るかも知れない。

ソーシャルワークに隣接する領域では、昨今、分野の垣根を飛び越え、積極的に多様な専門家達・関係者とコラボし「新しい境地」を開拓しつつある。多様な価値観や視点が錯綜するVUCAな時代だからこそ、研究所もあえてこの「幕間」に踏みとどまり、時代の「福祉」が真に求めているものの「正体」をその目でしっかり見極める時期なのかも知れない。

## 開設10周年を迎える 「アジア研」に寄せる期待と願い

顧問 田宮 仁



大学に附置ないし付属した研究所は、その大学の建学の精神や大学が志向する研究や教育の在り様を名実ともに如実に具現化している機関である。とりわけ私立大学においては、開学創業時の素志を象徴する機関であり、大学院開設などの発展期に設けられることが多かった。

一方で、昨今は、大学進学世代の人口減少や、時代や世の中のニーズに適応するために、あるいはその大学の生き残り策として、学部学科の改組転換、定員削減を余儀なくされるという変化・状況が生じている。そのような目先の変化への対応とは一線を画し、研究所は開学時の理念理想を堅持しながらその理念を活発に発展させる場として維持機能させていくべき機関と考えている。

2014年4月1日、長谷川仏教文化研究所から独立してアジア仏教社会福祉学術交流センター（以下センターと略）開所。2016年4月1日、センターを包含した形でアジア国際社会福祉研究所（以下アジア研と略）設立。どちらも学長直属の独立機関であり、秋元樹先生を初代所長とした。

秋元 樹初代所長は、センターの開設に際して「淑徳、アジアにおけるソーシャルワーク研究のハブとなる」という一文を『アップ・デート』仏研ブックレットNo.37に載せておられる。

そこには「アジア」「仏教」「社会福祉／ソーシャルワーク」を3つのキーワードとし、「学術交流」をミッションとした「研究のハブ」として機能することへの期待が込められていたと理解している。この3つのキーワードを掲げての国際的な学術交流のハブ機関となることは、学祖長谷川良信先生の遺志に違わぬものである。

ハブ(hub)、広辞苑には「車輪などの中心部の、軸とスポークの間の部材。(活動などの)中心。中枢。」とある。高校生の頃の自転車通学を思い起こすと、動力は自身であり人間である。ペダルの動きを伝えるチェーンやハブへの定期的なオイル注入や、タイヤのパンク修理、場合によっては部品交換を必要とした。また自転車は使用目的によってカスタム化が可能であった。

アジア研は日本のみならずアジアに唯一ともいえる「3つのキーワード」を持った、淑徳ならではのカスタム化した研究所である。

アジア研は来年2026年4月には開設10周年を迎える。全体を分解総点検し、汚れを落とし磨き上げ、オイルを注入し、必要な部品は交換し、タイヤの空気圧調整等も行って、より軽快に目的地に向かって走れるカスタム化を図るにはちょうど良い節目を迎える。

「アジア」「仏教」「社会福祉／ソーシャルワーク」を3つのキーワードにした研究と、その学術交流・人材育成へのハブ機関として、世界の誰もが利用したいと希望するような、またその希望を叶える機会を提供できる、よりスッキリとしたスマートな存在にしたいものである。

開設10周年を節目・記念として、センターとアジア研の2つ名前を一つにして「アジア国際仏教福祉研究所」と改組改名し再発進することで、踏み込むペダルも、より軽く、目的に向かえるはずと願っている。

## 転換期にある福祉課題を情報ネットワークで拓く



顧問 石川 到覚

21世紀の四半世紀となって想定 of LNRG (Local-National-Regional-Global) 視座で振り返れば、人類社会が対峙してきた問題や課題は、ローカルな新たな問題がナショナルな課題となり、リージョナルな危機が加わってグローバルな難題の解決も混迷を極めている今、まさに転換期を迎えたのだろう。

例えば東アジア諸国の少子高齢化が進むなか、日本の総人口は、従来の想定より急進して今世紀半ばに半減する予測から持続可能性が危ういとの研究もある。そのうえ震災と水害が多い日本は、2011(平成23)年3月11日の東日本大震災を「千年に一度」と評された被災の復興と、原子力発電所廃炉の至難な制御に今も対峙している。また、2016(平成28)年4月の熊本地震でも前震と本震で被災した4年後の線状降水帯の豪雨により老人ホーム入居者が犠牲になった。さらに2024(令和6)年元旦の能登半島地震と同年9月の豪雨が重なる被災地は、住民の望む復興が困難を極めたままである。こうした災禍に苛まれた地域は、過疎化によって急進する人口減少に伴った多様な福祉課題が「縮図」になっている。

淑徳大学(以下、本学)は、東日本大震災の未曾有な被災への復興支援とともに、それを契機にした2014(平成26)年には長谷川仏教文化研究所内にアジア仏教社会福祉学術交流センターを開設し、2016(平成28)年に本学創立50周年を期してアジア国際社会福祉研究所(以下、本研究所)を創設した。その研究活動では、アジア仏教諸国の調査研究を訪問国の福祉研究・実践者の協力に依って多くの成果を上げ、そこで意欲的に調査研究を始めた直後の2019(令和元)年末には新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が中国・武漢市のアウトブレイク(Outbreak)から東アジア圏域のエピデミック(Epidemic)へ、そして世界的なパンデミック(Pandemic)の感染拡大になった。その災禍に対峙したLNRG圏域すべての安全・安心・安寧を目指して果敢に取り組むEssential-workerが不可欠な姿となった「重ね絵」を忘れてはなるまい。

それら多様な変動や災禍など複雑に絡み合った福祉課題が顕在化する多難な時代となり、その動向下における本研究所は、仏教福祉理念の縁起観を踏まえた人類の生存に不可欠な相依の関係性をつなぎ、国内外の研究者同志の信頼関係に基づく情報ネットワークを駆使したりリモート会議を重ね、精力的に業績を上げて10年の節目を迎える。奇しくも本研究所の立ち上げ当時、歴史学者のY.N.ハラリ(2014)『サピエンス全史—文明の構造と人類の幸福』に論じられた人類が認知と農業と科学の革命段階を経たとする言説に衆目が集まっていた。それに続く同(2016)『ホモ・デウス』には生態系の危機とイデオロギーの緊張関係を紐解いていた。さらに近著の同(2025)『NEXUS 情報の人類史』におけるAI(人工知能)情報のネクサス(つながり、結びつき、絆など)を秩序あるネットワークに進化させる考え方と、人類の強みとなった物語のネクサスで紡がれる情報ネットワークを通して協力し合う重要性の言説に着目したい。

まさに転換期の福祉課題を超克する方向性は、本学が創立されて以来、研究・教育人財を擁してきた高等教育・研究機関だからこそ、学祖・長谷川良信先生が提唱された大乘仏教福祉の実践原理に立ち返り、本研究所が蓄積してきた「情報ネットワーク」を駆使して果敢に切り拓くことなのだろう。



## 「仏教とソーシャルワーク教育」

— 仏教からの知見をソーシャルワーク教育にどう活かしていくか —



アジア国際社会福祉研究所  
所長 戸塚 法子

### はじめに

今年2月に行われたアジア国際社会福祉研究所の国際フォーラムでは、仏教とソーシャルワークという企画に関し、いろいろな発題、議論がなされていった。このフォーラムに参加された方々と多くのことがらを共有できていった意義は非常に大きいと思われる。

そのなかで今後一つの方向性として見えてきたことは、仏教がこれまで蓄積してきた“人”に関わる知見を現在のソーシャルワーク教育やソーシャルワークを学ぶ学生達に発信していける“財産”として、ソーシャルワークに基盤をおく私達がどのように伝えていったら良いのか、ということである。

そうした背景をもちつつ、本稿は戸塚が2月の研究所第9回国際フォーラムで発題した口頭での内容に基づきながら、国内のソーシャルワーク教育やソーシャルワーク実践教育が今まさに抱えている課題に対し、仏教のどのあたりに着眼しながら進めていったら良いのか、そのあたりからまずは整理することをここでの主題としていく。

また、本稿で筆者が言及していく仏教の範囲は、主としてブッダが後世に伝えた「教え」に焦点を絞って取り上げていくことに限定した。そして筆者がここで想定するソーシャルワーク実践の担い手は、包括的なソーシャルワーク実践を念頭におきつつ、専門的教育や訓練を受けたソーシャルワーカーのみならず、彼らが共に活動していく、ソーシャルワーカーが寄り添っていかなければならないケア対象者の方々の身近におられる多様な対人援助職の方々も含めている。さまざまな援助関係者が、どのような立ち位置でケア対象者の方々に向き合う場合であっても、“共通基盤的意味あい”として、対人支援の基盤に据えていなければならない、仏教から学ぶ知見について、検討していければと考える。

### I ソーシャルワーク教育において教育者が「こだわりをもって」教えていかなければならないものは何か

ソーシャルワーク領域において、西洋的な考え方に基づくソーシャルワーク・アプローチが世界の多くの地域に広く深く浸透してきていることは紛れもない事実である。そのなかで、筆者を含めソーシャルワーク教育・訓練を受けてきた者は、ソーシャルワークに関する学びの初期から、西洋的な脈絡を通して考え・理解すると言うことを、知らず知らずのうちに習得してきたように思われる。今あらためて「ソーシャルワークとは」という原点に立ち返ってみたとき、筆者はそこでの“肝”になってくるものは、援助プロセスを実質的に機能させていくことになる、援助者側とケア対象者の方々とで創りあげる「関係性」であると考えている。そしてその「関係性」に着眼したとき、とりわけソーシャルワークに携わる私達が一番忘れてはならないことは、寄り添っていく方々、ケア対象とされる方が、「刻一刻と常に変化し続けている」ということである。そしてこのことは、私達実践者側にも同様に言えることになる。すなわち、ソーシャルワーク実践に関わっ

ている全ての人間は、それが誰であっても皆、刻一刻とさまざまに「変化」し続けているということなのである。

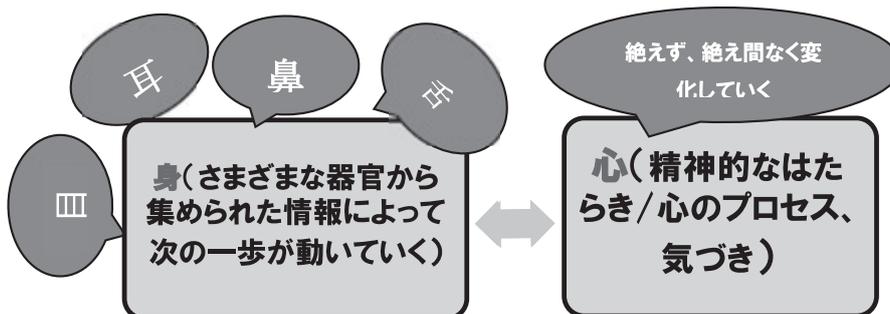
この「刻一刻と変化し続けている」ということは、先に触れた「関係性」そのものも、微妙に変化し続けていくことになっていく。全体としての援助プロセスに内在する大小さまざまな「関係性」は、この私達個々に生じる「変化」とも「同期」しつつ、「関係性」自体を微妙につくりかえていくことになっていく。こうした「関係性」自体のもつ基本的な特徴を、私達はこれまで「どの程度」身体感覚器官との関連で理解してきたと言えるだろうか…。そして「関係性」には、「時間軸的側面」のみならず「空間軸的側面」も含まれてくるため、私達全ては皆、まさに変化や成長を絶えずし続けていく「デリケートで複雑な生命体」と言うことができる。

図1 現象の捉え方について（作成：筆者）



ではまず、私達は相手と「関係性」を構築していくための“基”となる情報を、どのようにして入手しているのだろうか。それは私達の身体に無数に点在している感覚器官からである、ということになる。感覚器官から入手された無数の情報は、統合されていき、最終的に私達へさまざまな「気づき（発見）」を引き起こしていくことになる。この“プロセス”を「関係性」の原点としたとき、最初に問い直したい“関係性”は、従来ソーシャルワーク教育や訓練において焦点を当ててきた問題の「心理・社会的側面」への問い直しである。私達の身体に点在する感覚器官から得られた複数の情報が一つにまとめられていき、それらからある「気づき（発見）」が生まれていき、やがてそれらが私達に何らかの「心（思い）」を生み出し、その「心（思い）」が私達自身を新たなソーシャルアクションへと動かしていく。そしてその一連のプロセスを通して、私達は成長し続けていくと考えるならば、ソーシャルワークが焦点を当ててきている「心理・社会的側面」は実際のところ、情報入手経路の起点である「身体的側面／感覚器官」と切り離して理解することはできないはずである。

図2 身体感覚器官と各種情報の入手経路（作成：筆者）



## II 最近筆者が体験した仏教ソーシャルワーク実践から少しずつ見えてきたもの

ここで筆者の臨床体験を通じて獲得していったある「気づき」のプロセスについて少し触れておきたい。それは仏教僧の方が統括している仏教系社会事業団体が行っている主として路上で生活されている方や経済的に苦しい状態にある方へのケア活動に一定期間関わった際の体験談になる。筆者はそれまで学生時代から三十数年以上にわたり、北米から日本へと輸入されてきたソーシャルワーク・アプローチについて学び、そこから得た知見に基づいて自らのソーシャルワーク観を組み立ててきた。

しかし10年ほど前から、いわゆるそうした西洋由来のソーシャルワーク・アプローチに対し、筆者は言葉ではうまく表現しづらい「違和感」を感じ始めるようになっていった。アセスメント・プランニング・アクション／モニタリング・エヴァリュエーションと続いていく「ソーシャルワーク・プロセス」において、“(寄り添う人) ケア対象者”の方の心理・社会的な側面に注力しつつ、その“基”となる情報収集とそれらの情報に基づく推論を行っていくなかで、実に何とも言いがたいような「違和感」にさいなまれていった。そんなある日、筆者はふと、西洋由来のソーシャルワーク範疇のなかで悩み続けていても、現在自身が迷い込んでいる迷路からの脱出は難しいのではないだろうか、と感じるようになっていった。筆者はその後一念発起し、西洋由来のソーシャルワークとはあえて少しずつ距離をおきながら、前述した仏教系団体が主催する実践活動に参加し続けていった。それは、路上で生活する方々が抱える苦しみ・悲しみに寄り添っていくという、自身にとって新鮮な実践経験であった。まさに“ゼロベース”から、そして筆者の全身に散らばっている感覚器官をフル稼働させながら、目・耳・皮膚といったそれぞれの感覚器官に入り込んでくる多様な情報を取り込んでいった。ケア対象者の方の「思い」に真にしっかりと寄り添っていくためである。そうした思いを意識しつつ日々が過ぎていったある日、筆者の内にある「疑問」がふと沸き上がってきた。筆者はその疑問への回答を探しつつ調べあさった仏教書から筆者の目に飛び込んできたのが、ブッタによる「五蘊の教え」であった。

図3 ブッタによる「五蘊」のプロセス

(「五蘊」の要素とその連関について、複数の資料に基づきながら筆者がさらに要約したかたちで以下に整理)

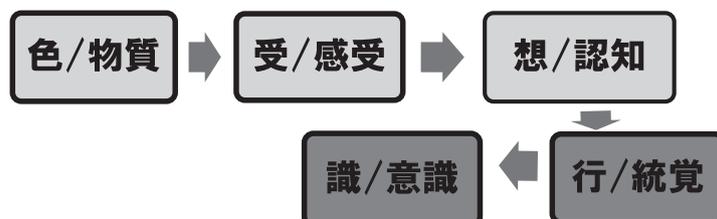


表1 ブッタによる「五蘊」の教え①

(「五蘊」の要素とその連関について、複数の資料に基づきながら筆者がさらに要約したかたちで以下に整理)

「五蘊」：ブッタが提示したもの —存在を構成する五つの要素—	
1.	色蘊 <small>しきうん</small> … 認識の対象となる物質的な存在。さまざまな感覚を通じて心のなかに構成されていく。
2.	受蘊 <small>じゅうん</small> … 眼、耳、鼻、舌、身を通してあらわれてくる感覚作用(さまざまな快、苦)。
3.	想蘊 <small>そうん</small> … 「受」によって生じた認知を概念としてまとめていく作用。
4.	行蘊 <small>ぎょうん</small> … 意欲、志向性、煩惱、として発出していく作用。
5.	識蘊 <small>しきうん</small> … 対象を識別、分別、認識、意識していく作用。

以前の筆者であったならば、自らにもともと備わっている「感覚器官」という、アセスメントのまさに“起点”をさほど意識することなくソーシャルワーク実践と向き合っていたかも知れない。筆者が学んできた西洋由来のソーシャルワークに関する教科書や専門書の類には、「五蘊」で示すような内容は見当たらなかった。他方で筆者はケア対象者の方との関わりを通し、意識的に自らの感覚器官をフル稼働させていくなか、自身の動きと「同期」するかたちで、筆者の内側へとブッダの「五蘊」の教えがじわりじわりと入り込んでいったのである。貧しさゆえに自らが住み慣れた地域を離れて暮らさざるを得なかった方々、療養生活や持病の苦しみを抱えながら、それでも生き続けなければならない生活を余儀なくされている方との「関係性」。そうした方々との「関係性」のなかで、会話そのものを失いかけている方もいれば、私達との会話に一筋の喜びを滲ませながら何気ない会話のなかから何かを見つけ出そうとされる方もおられた。そうした「関係性」を通し、ケア対象者の方と私自身が紡ぎ出す「関係性」のプロセスにおいて、そこに介在するモヤモヤ感、違和感を吹き飛ばしてくれたのが、このブッダによる「五蘊」の教えだったのである。西洋由来のソーシャルワーク専門書では見かけることのない「(当事者の)意識の変容プロセス」に見られる“移り変わりのさま”を理解していくさまざまなヒントが筆者の奥深くにしっかりと食い込んでいったのである。

表2 ブッダによる「五蘊」の教え②-

(「五蘊」の要素とその連関について、複数の資料に基づきながら筆者がさらに要約したかたちで以下に整理)

1. 色(含：身体)… 認識の対象となるものすべての総称。物質的な要素。そしてそれらが感覚を通して心象を形成していく。そして私達はここから、さまざまな感覚、物質的要素がもたらす感触を主観的に感じ取っていく。こうして、その人の内側にいろいろな情報が集められていく。
2. 受… 眼、耳、鼻、舌、身、意といった感覚器官(仏教で言う「六根」)と、それを通して捉えられる情動や感情になる。この「受」によって心に留められる記憶は、その後の経験のしかたさえも条件づけるだけでなく、仏教でいうところの「業」を生み出す「因」ともなっていく。
3. 想… 事物の特徴を捉えること。先の「受」で生じた情動・感情を概念としてまとめていくことになる。推論・思考において必要なはたらき。
4. 行… 心情を通して形成された消滅や変容していくすべてのもの。私達の身体・心のなかに時間的な変遷を通して埋め込まれていったさまざまなもの。そうしたものが、私達の意欲や志向性、あるいは煩悩として発出していく。(しかし)「行」の段階では、まだ潜在的なレベルに留まっており、意識上にあがってきてはいないとされている。意識上にあがって明らかなたちをとる、その前の「推定」やその人の「心理的傾向」「動機」といった、広範囲に及ぶものになる。私達の意識の奥に留まりつつも、実際のところ、意識の働きを左右・支配していくことになる。(西洋の精神分析学で捉える「無意識」より深く広いと考えられている)
5. 識… 知る・認識すること。気づくこと。その「人」を特徴づけていくもの。常に何かに向けられている“心のいとなみ”であり、「識」が動いている根底には、「思」が引き起こす「煩悩」があると言われる。

そしてこうした延長線上で、筆者が師と仰ぐ仏教僧の方から、その後のわたしを変える「深い気づき」をいただくことになっていった。しかし当時、浅学な私にとって仏教僧の方からいただいた指摘は、「違和感」以外の何ものでもなかったことを記憶している。貴重な指摘をすぐには受け容れられず、筆者の内側で日々葛藤し悩み続けるという辛い時間を過ごすことになっていった。当時のことを振り返ってみると、「五蘊」の教えと筆者が初めて出会ったときのように、筆者のなかに長らく埋め込まれている“西洋由来の思考基盤”が、筆者から発する全ての「援助/寄り添い」そのものをコントロールしていたのかも知れない(これは、五蘊で

いう「行」なのでは)。

筆者がそれまで依拠し続けてきた西洋由来のソーシャルワーク観は、「問題解決型の思考方法」そのものであった。

しかし今回、ブッダの教えが自らのなかに浸透していくことと同期して実践活動に身をおいていくなか、自身が寄り添っていく対象である相手の方が深く願っているものや、その方々がたどってきた数多くの選択をまずは受け止めつつ、そのうえでご本人が「これからどう在りたいのか」について、その思考プロセスに伴走し、支え続けていくという姿勢を少しずつ取れるように(筆者自身が)変化していった。その方々の“語り”を丁寧に傾聴し、その方の今・ここでの「心情」に没入し共感していく。そうした「傾聴の大前提」とも言える態度が、知らず知らずのうちに、我流的「問題解決型の思考や情報収集の方法」へとすり変わっていたということにあらためて筆者自身が気づかされていったのである。

筆者がケア対象の方と向き合っていくプロセスのなかで、筆者自身の感覚器官から入り、その後統合されていった情報に基づきながら、本来ならば、もっと別の意味あいでの(もっと違った次元での)「その人の思い/本音」と向き合えたかも知れないのに、筆者の内にある、我流的な問題解決型思考が自身の実践をコントロールしてしまっていたことに気づくのに、多くの時間を費やすことになってしまった。今ふりかえれば、「ケア対象の方が真に求める”必要”」と「筆者(支援者側)が考え出したケア対象者の方の真の”必要”」がズレてしまっていたことへの筆者の自覚がなされていった時期が、ブッダの「五蘊」や「十二支縁起」と出会い、そこで生じていった「多くの気づき」を得た時期と重なっていたのである。とは言いつつも「五蘊の教え」「十二支縁起」は、仏教の教えを学び始めて数年しか経っていない筆者にとって、想像をはるかに超えた難解な“教え”であったことは言うまでもない。しかし筆者が、ブッダの「意図」に何度も近づいていこうとするたび、それが「副産物」と言えるかどうかかわからないが、確実に筆者自身の内に「(五蘊・十二支縁起で言うところの)想」に近い“拡がり”を体感できるように変わっていった。

こうして筆者は自身の実践活動に「五蘊・十二縁起」の教えを幾度となく重ねていこうとするたび、自らの奥底にあって「今」の筆者に確実に影響を与え続けてきた「西洋由来のソーシャルワークが有する”捉え方”」と対峙することにもなっていった。これまで筆者が抱いてきた葛藤の根っこに巣くっていたある種の“違和感”「(五蘊・十二支縁起で言う)行」のようなものが「(五蘊・十二支縁起で言う)識」へとつらなっていくプロセスにおいて自身で内省・内観を続けていくことで、やがて十二支を構成している「構成要素」間のつながり合いのようなものを、全体として理解していく質的により一つ上がった次元へと、以前より明らかに高まっていくことにも気づいていった。さらにそこに多くの時間を費やしていくなかで、筆者は「(五蘊・十二支縁起で言う)行」から「(五蘊・十二支縁起で言う)識」へと至るプロセスを歩み進めていくうえで、真の“変化/飛躍”へのターニングポイントとなる局面としての、「無明」の局面を意識することの重要性をしいに感じ始めていったのである。それは筆者にとって仏教系社会事業団体でのソーシャルワーク体験が終了し1年ほどが過ぎてからのことであった。そこに至るまでのプロセスは、筆者にとって想像を超える辛い葛藤の連続であった。カオス、カオスの連続の期間と言えるものであった。

しかしブッダが「無明」という「支(局面)」に込めた深くて大きな“思い”に、浅学な筆者がもがきつつも近づいていったことで、筆者の身体が、以前からの“違和感”から解き放たれ不思議なほどに軽くなっていったことも確かであった。十二支縁起の各支(各局面)間の“つながり(円環)”は今後も引き続き、筆者の心の内側で回り続けていくのであれば(まさに仏教ソーシャルワークの「基盤」となるサークル・オブ・ライフ)、ソーシャルワーカーとしての筆者の「成長」のプロセスも、十二支各支の局面にしっかりと同期し刻み込まれていくのではと感じている。しかしまだ、仏教からの学びを続ける筆者の歩みは“始まったばかり”なのである。

図4 「意識」に関わるプロセスと“十二支縁起”-その①-

(「十二支縁起」の要素とその連関について、複数の資料に基づきながら筆者がさらに要約したかたちで以下に整理)

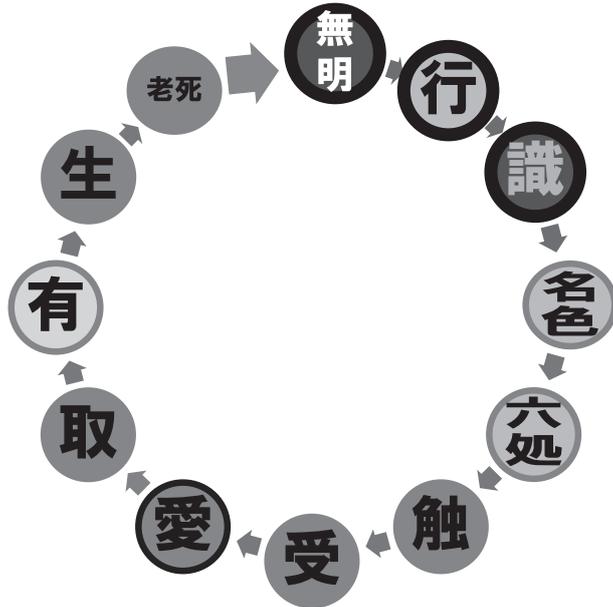
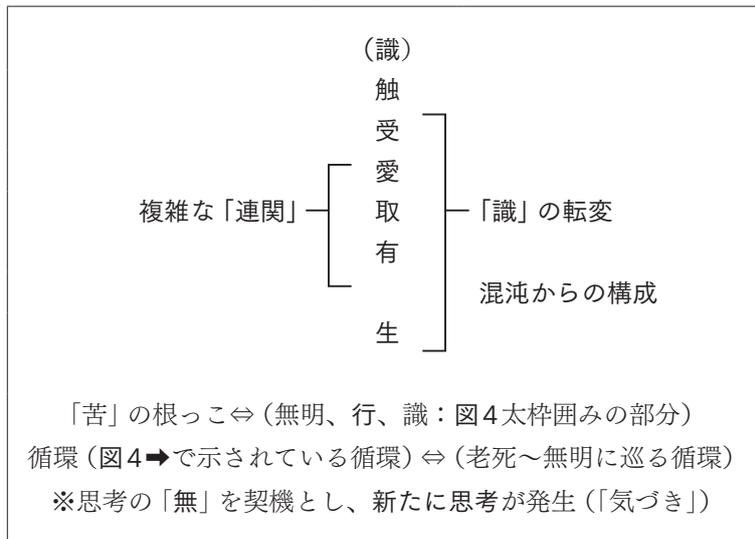


表3 「意識」に関わるプロセスと“十二支縁起”-その②-

(「十二支縁起」の要素とその連関について、複数の資料に基づきながら筆者がさらに要約したかたちで以下に整理)



### III (あらためて) ブッダの「五蘊」「十二支縁起」がソーシャルワーク教育にもたらすもの

こうして筆者は「仏教」と出会い、それまで感じたことの無かった「成長」を一步一步重ねていった。この「成長」経験はまさに「ものごとは“心”にもとづき、“心”を主とし、“心”によって作り出されていく」こと、そのものであったように思う。

我が国のソーシャルワーク教育にさまざまな影響を与えてきた西洋的思考、西洋的価値観、そのいずれもがその時々時代のなかでその時々社会的背景に影響を受けながら発展してきたことも事実である。そうした長い成熟のときを重ねながら、今日もお発展し続けてきている。しかしそうしたなかであっても、従来の西洋由来の「思考枠組み」一辺倒な状況から私達の「身」を少しづらしてみること(と言っても西洋

由来の「思考枠組み」に長く居座ると筆者のように多くの時間を要するかも知れないが)、何かとても新鮮な「思考の拡がり(発見)」に出会うことができた。私達がソーシャルワーク教育のなかで、いわゆる“メイン・ストリーム”として教え込まれてきたものだけで解決することの難しい「人々の心の内の営み」に触れ、気づき直し、複雑な心の動きとそれに連動した身体の行動がなぜ起こってくるのかをしっかりと見極めるために、まずは自身の「身」を“メイン・ストリーム(西洋由来の思考枠組み)”からずらしてみることの重要性を本稿で提起したい。そうした“プロセス”に「身」をおくことで混乱したりすることもあると思われるが、それでもあえて一定の距離をおくことで(西洋由来のソーシャルワークを今後遠ざけることを意味してはいない)、「新しい気づき(発見)」と出会いや、その「気づき(発見)」を周囲に伝えていくことで、世界のさまざまな地域に暮らす人々は、実は多くの「共通基盤」を有していることにも気づかされていくのだと考える(現時点までに多くの共通基盤と誰もが認めていることに“加えて”。

そうして現れてくるソーシャルワークの新しい「種」を、地球上のさまざまな場所で暮らす人々の足元で、それぞれの地域で汲みあげた水や、その地域を覆っている空気や、その地域で生まれた文化性のなかで育てていくことにより、真に望まれる「果実(成果)」が実っていくのではないだろうか。

生み出されていったソーシャルワークの新たな“種”は、誰に強要されるのでもなく、自然の風(人々の内から出る思いや決断等の意味)に委ねられながら、どこにでも飛び拡がっていく。そうした新しい「種」の飛来こそ、今、まさにソーシャルワーク教育界において望まれていることであると筆者は考える。

社会の荒波に揉まれ、心が傷つき荒んでしまった一人ひとりが、自身にとって真にふさわしい方向に新しい歩みを進めていくためにも、大きな歩みを進めていくうえでの「きっかけ」との出会いが必要になってくる。そうした「きっかけ」を起こしてくれる無限の可能性を秘めているブッダの“教え”は、VUCAな社会を生き抜いていかねばならない一人ひとりのwell-beingに伴走していくソーシャルワークにおいても、無限の教育上の魅力をもたらしてくれるものと考えられる。

表4 「十二支縁起」：ブッダが提示した「プロセス」  
 (「十二支縁起」の要素とその連関について、複数の資料に基づきながら筆者がさらに要約したかたちで以下に整理)

1. 無明 … 根源的な無知	2. 行 …… 「無明」から生じる意欲
3. 識 …… 意識(眼識、耳識…)	4. 名色 … 物質・精神的なもの
5. 六処 … 感覚器官(眼、耳…)	6. 触 …… 「六処」から生じる触
7. 受 …… 感覚的感受(苦、楽 等)	8. 愛 …… 欲求、欲望、執着
9. 取 …… 欲望の追求、獲得	10. 有 …… 存在の維持、進み続ける
11. 生 …… 生命が生じる過程、「有」の結果としての存在の始まり	
12. 老死 … 老化と死。老化の過程と生命の終焉	

## 結びにかえて(まとめ)

最後に、筆者が冒頭で掲げた「仏教とソーシャルワーク教育－仏教からの知見をソーシャルワーク教育にどう活かしていくか」に関し、自らがブッダの“教え”と向き合うプロセスのなかで掴んでいった以下の5点を記すことで、この研究ノート「まとめ」に代えていきたい。

1. ソーシャルワークのように、悩み苦しむ方と向き合い続けていく活動(実践)は、直線的因果性だけではその説明が難しい。それゆえに、循環的・円環的な因果性を前提としながら、常に変わり続けていく「プロセス」の内側に見えてくるさまざまな“動き”にも注力していく「仏教」の“教え”に基づく枠組みは、ソーシャルワーカーが求めているものと深く重なりあってくる。

2. ブッダの重要な“教え”である「仏教」の共通部分を成す「(人を構成する要素としての)五蘊」や「十二支縁起」は、我々の意識の流れや、心の複雑性を理解していくうえで非常に有益である。「心」の動きに関連する要素間の結びつき、「～が故に」といういわゆる“because”で連なる因果関係性は難解ではあるものの、かなりクリアな「気づき」を私達に提供してくれる。ひいては人に寄り添い続けていくソーシャルワーカー側にとっても無限の気づきを提供してくれる。  
ブッダの“教え”は、人々の思考が、どの時代であっても、どの地域、あるいは場所においてであっても、辿り続けるであろう共通で普遍的な道筋の一つを確実に示してくれる。さらに「自律的な存在」として人間が有する無限の可能性に私達をいざなってくれる。
3. ブッダの“教え”が示す、人々に関する深い洞察や観察眼は、ソーシャルワーク活動が誰を対象にいかなる次元(場、状況)において展開していこうとも、援助プロセスにおける全体としての“質”を左右する「アセスメント」や「モニタリング」「エヴァリュエーション」に新鮮な気づきと“拡がり”を与えてくれる。
4. ブッダの“教え”が示す利他的活動は、ソーシャルワーク援助の神髄に位置する重要な姿勢と重なってくる。「仏教」が説く「愛」や「慈悲の心」、「さまざまな執着から解き放たれての友愛的、能動的な感情」に(私達が)あらためて気づくこと無しには、現代資本主義がもたらす社会的・国際的問題や、深刻な格差の実態に福祉マインドをもって向き合っていくことは難しいと考える。
5. 文化が異なれば大きく相違してしまう信念や概念、生じてくる葛藤等を、狭い想像力や先入観によることなく、実際に「あるがまま」に見つめ、勇気ある行動を起こしていくためにも、ブッダによる「ありのままー如実知見」が示す“教え”は、ソーシャルワーク教育に無限の可能性を伝え続けてくれる。

#### [参考文献]

- 浅野孝雄(2022)『(改訂版『心の発見』)ブッダの世界観』産業図書(375)  
ウォルター・J・フリーマン、浅野孝雄訳、津田一郎 校閲(2011)『脳はいかにして心を創るのか』産業図書(260)  
小林三剛(1979)『東洋医学講座』第一巻 基礎編 自然社(247)  
城福雅伸(2002)『明解【仏教】入門』春秋社(308)  
東洋療法学校協会編(2015)『東洋医学概論』医道の日本社(330)  
東洋療法学校協会編(2022)『解剖生理』医歯薬出版株式会社(326)  
中村元、福永光司、田村芳朗、今野達、末木文美士編(2002)『岩波仏教辞典(第二版)』岩波書店(1246)  
日本仏教社会福祉学会編(2014)『仏教社会福祉入門』法蔵館(210)

# 1970年代の国際ソーシャルワーク学校連盟国際会議録から学ぶ： アジア国際社会福祉研究所の知見と重ねて

アジア国際社会福祉研究所  
上席研究員 松尾 加奈



## 要約

国際ソーシャルワーク (international social work) が初めて文献に登場した1928年から間もなく100年となる。本稿では、淑徳大学が収集した国際ソーシャルワーク学校連盟刊行物をレビューし、地域連盟創設前後での国際会議におけるソーシャルワーク教育の言説を整理する。国際社会福祉 (国際ソーシャルワーク) の研究所が蓄積した知見に照らし合わせ、研究所が歩むべき方向性についても考察する。

キーワード：国際ソーシャルワーク；ソーシャルワーク教育；ソーシャルワークの伝播；インディジナイゼーション；国際ソーシャルワーク学校連盟

淑徳大学図書館には国際ソーシャルワーク学校連盟 (International Association of Schools of Social Work; IASSW) が刊行した書籍やIASSW理事経験者の書籍が所蔵されている。これらの書籍の発行年は1970年代に集中していた。国際社会福祉研究をミッションとする研究所であれば、これらの先行研究を押さえなければならぬ。また、この1970年代の図書には、第9回国際フォーラム登壇者Tasse博士の講演を理解するために重要な情報、ヒントも数多く含まれていた。

本稿は、淑徳大学図書館所蔵のIASSW刊行物について記録した研究ノートである。そのうえで、国際ソーシャルワーク研究を深める可能性を持つアジア国際社会福祉研究所の方向性について考察した。

## 淑徳大学図書館の国際ソーシャルワーク関連蔵書概要

この報告は、筆者が2024年度より進めている国際ソーシャルワーク研究におけるソーシャルワーク教育の国際団体並びに理事経験者たちの貢献に関する研究の一角をなすものである。また、2024年11月に開催された第1回国際ソーシャルワーク協会学術集会での報告に向け収集した資料と投稿論文が基となっているが、本稿執筆にあたって改めて内容を精査、大幅に改変、再構成したものである。

## 調査方法と期間

調査期間は、2024年4月から2024年12月4日までとした。キーワードを「International Social Work」と設定し、図書館の蔵書リスト (OPAC) を利用して検索した。

## 研究結果

### 蔵書数と傾向

淑徳大学図書館が収集した文献のうち、キーワードでヒットした図書は104件、雑誌5件、電子書籍は1件であった。文献の言語は「日本語」が58件、「英語」が54件、「使用言語不明」が1件であった。<sup>1</sup> ソーシャルワークの国際会議が初めて開催されたパリの報告書はフランス語と英語で作成されていたことや、IASSW初代

会長Alice Salomonがドイツからアメリカに亡命したユダヤ人だったことから、英語以外のフランス語やドイツ語による文献の存在も期待されたが、蔵書ではヒットしなかった。

表1 淑徳大学図書館収蔵のInternational Social Work関連文献(2024年12月4日現在)

	文献の種類		言語					使用言語不明
	図書	雑誌	電子書籍	日本語	英語	フランス語	ドイツ語	
淑徳大学図書館蔵書数	104	5	1	58	54	0	0	1

(OPAC検索データを元に筆者作成)

「筆者／関係者」、「出版者／発行者」で分類したものが、表2である。「出版者／発行者」が「IASSW」である図書は14件であった。「筆者／関係者」でみると、IASSWという組織である文献は2件、International Congress of School of Social Workによる文献が3件であった。Katherine KendallのようにIASSW理事・役員がファースト・オーサーとなり、IASSWが発行した図書が多かった。また、国際会議の報告書が多いことが分かる。なお「アジア国際社会福祉研究所」関連の文献が12件あった。

表2 淑徳大学図書館収蔵文献の「筆者／関係者」および「出版／発行者」別件数(2024年12月4日現在)

淑徳大学図書館	「International Social Work」をキーワードとする「図書」の「筆者／関係者」、「出版者／発行者」	件数
筆者／関係者	IASSW	2
	International Congress of Social Work	3
出版／発行者	IASSW	14
	(参考) アジア国際社会福祉研究所関連(学文社含む)	12

(OPAC検索データを元に筆者作成)

淑徳大学図書館に所蔵されている文献のうち、図書の発行年については、2つの「山」が見られた。発行された期間のうち「1995-2008年」が最も文献数が多く33件、次いで、「1973-1978年」の20件であった。本稿で取り上げたIASSWの刊行物は重複していた2冊を除き、全て1970年代の資料であった。

表3 淑徳大学図書館収蔵文献(図書)の発行年

発行年	淑徳大学
1927～1956年	6
1958～1967年	16
1968～1972年	9
1973～1978年	20
1979～1984年	8
1987～1993年	5
1995～2008年	33
2017～2024年	7
合計	104

(OPAC検索データを元に筆者作成)

IASSWが「筆者／関係者」あるいは「出版者／発行者」であった14冊の図書の一覧にまとめたものが、表4である。最も古い図書は、1972年に刊行された「人口と家族計画」に関する論稿集であり、以降、1978年まで、毎年のようにIASSWの関与により刊行された蔵書が、図書館蔵書として登録されていた。

表4 蔵書のうちIASSWが出版、あるいは筆者である図書一覧

筆者	刊行年	書名	備考
Oettinger, Katherine Brownell & Stansbury, Jefferey D.	1972	Population and family planning: analytical abstracts for social work educators and related disciplines: a reader's guide to the Reference bookshelf for schools of social work	ソーシャルワーク教育、人口問題、家族計画に関する論稿をまとめたもの。(Oettinger, et al. 1972)
	1973	New themes in social work education: proceedings of the XVIth International Congress of Schools of Social Work	1972年8月にオランダ・ハーグで開催された国際会議 International Congress of Schools of Social Workの報告書。当時IASSW会長だったHerman Steinは「インディジナイゼーションの時代に入っている」と述べていた。また、オーストリア、スイスの参加者は先住民としてを、フィリピンの参加者は「我々の」という意味でインディジナスを使っていた。(IASSW 1973)
	1974	A Developmental outlook for social work education: a report of a seminar on "maximizing social work potentials for family planning and population activities"	1973年11月にシンガポールで開催されたセミナーの報告書。アジア太平洋ソーシャルワーク教育学校連盟 (APASWE) 設立前に開催され、地域連盟設立に貢献したフィリピンの Angelina Almanzor がプログラム・コミッティ委員長であった。(IASSW 1974)
Stickney, Patricia J. & Resnick, Rosa Perla	1974、 1984	World guide to social work education	日本については明治学院大学、日本社会事業大学のカリキュラムが掲載されている。1984年に改訂版が発行された。2冊とも所蔵。1984年版の日本の社会福祉教育については、日本女子大学の教育システムのみについて記載されている。(Rao, et al. 1984; Stickney, et al. 1974)
	1975	Education for social change: human development and national progress	1974年7月にケニア・ナイロビで開催された国際会議 International Congress of Schools of Social Work の報告書。(1975) なお、この会議でAPASWEの前身団体 ARASWE が設立された。また同じ年に、Friedlander の「International Social Welfare」International が刊行されている。(Friedlander 1975)
	1977	People & Places: social work education and human settlements	UN、HABITAT とのジョイントセミナーをブリティッシュ・コロンビア大学で行った論稿集。(1976年6月6～10日) IASSW とアメリカの CSWE、カナダの Association of Schools of Social Work、UBC のコラボ。アメリカの参加者として、富田輝司 (Terushi Tomita, East Tennessee State University) の名前がある。(1977)
	1977	Social realities & the social work response: the role of schools of social work	1976年7月にプエルトリコで開催された国際会議 International Congress of Schools of Social Work の報告書。(International Congress of Schools of, et al. 1977)
Hokenstad, Merl C. & Rigby, Barry D.	1977	Participation in teaching and learning: an idea book for social work educators	ジャマイカ、香港、マニラでの International Population Education and Family Planning Project の一環としての会議と、フッティングムでのセミナーで共有された受講者参加型のソーシャルワーク教育のアイデアを集めた本。アジア8か国のソーシャルワーク教育開発セミナーの記録も引用されている。(Hokenstad, et al. 1977)
Rigby, Barry	1978	Short-term training for social development: the preparation of front-line workers and trainers	教育ではなく、社会開発を進める上で地域において機能できるトレーニングを、パラプロフェッショナルに提供するプログラム例。パラプロフェッショナルには、僧侶、尼僧、信徒が含まれていた。(Rigby 1978)
Kendall, Katherine	1978	Reflections on social work education, 1950-1978	IASSW の事務局長 (Secretary General) を長年務め、名誉会長となった Kendall の講演録を含む。(Kendall 1978)
Ankrah, E. Maxine	1978	Family Welfare in Africa	1977年2月にケニア・ナイロビで開催された、第2回アフリカ・サブリージョナル・セミナー「Family welfare as a development strategy」の報告書。(1978)
	1995	IASSW Directory	2002年にリプリントされたバージョンとともに2冊所蔵されている。Lena Dominelli が副会長時代に編纂された会員名簿。当時はアメリカの大学会員数が多かった。(IASSW 1995; IASSW 1995, reprinted in 2002)
Pangalangan, Evelina A. & Pineda, Josefina D.	n.d.	Casebook on a two-country experience of social work practice in family planning and population education: sixteen (16) case studies	内容から1980年代前半と考えられる。IASSW と IFSW が International Planned Parenthood Federation (IPPF) のスポンサーを得て、タイとフィリピンの2か国で実施され1981年に報告書が発行された。(Pangalangan, et al. n.d.)

(筆者作成)

なお、IASSWとは直接関係のある出版物ではないため、表4には含まれていない希少な書籍も蔵書登録されていた。国連が1964年に刊行した「Training for Social Work: fourth international survey」である。このプロジェクトの中心にいたのはIASSW名誉会長であるKendallであった。プロジェクトは、第二次世界大戦後の1954年から1971年まで数回にわたって、世界各国のソーシャルワーク専門職（職業）教育に関する調査<sup>ii</sup>するものであった。

IASSWの理事会議事録や、表4に示す国際会議の報告書でもたびたび引用されている一連の貴重な報告書のうち、1964年に発行された国連の報告書もまた、淑徳大学図書館に蔵書として登録されていた。なお、Kendallの名前はほぼすべての報告書に記載されていた。彼女がSecretary-generalを退任する際、IASSWは、記念の書籍「Reflections on social work education, 1950-1978 (ソーシャルワーク教育を振り返って：1950-1978年)」を刊行したが、この書籍も図書館に所蔵されていた。なお、書籍のなかでKendallは、「ソーシャルワークは、世界中のあらゆる人にとって同じものではない。しかし各国に共通する知識と価値観の基盤の上に成り立っていることを、私は改めて学んだ」と述べていた。(Kendall 1978)

## 考察

淑徳大学図書館の蔵書には、1970年代に開催された国際会議の報告書 (proceeding report) や理事が執筆した書籍が10冊以上保管されていた。これらの文献は、西洋ルーツのソーシャルワーク専門職教育の伝播の歴史の中でも、ターニングポイントとなる「ソーシャルワーク教育の帝国主義」(Midgley 1981) 論文発表の直前までとなり、当時、ソーシャルワーク教育者が国境を超えて交流し、議論した記録の一部としての貴重な記録である。また報告書に登場する人々は、国際ソーシャルワークの研究者として、また地域連盟の貢献者として名前を刻む人々も多かった。

他方で、インディジナスを、文脈と話者によって、「先住民」として記録されたり、「われわれの住む土地に根付く」として記録されたりしていることもわかった。「ソーシャルワーク」の議論は、圧倒的な質と量によって、西洋ルーツのソーシャルワーク専門職のフレームで語られつつ、伝播した先の国々では、「国際ソーシャルワーク」として語られている可能性が見えてきた。

また、パラプロフェッショナリズムの議論に見られるように、ソーシャルワーク専門職教育が高等教育機関で行われているために、高等教育に進学できない人々が第一線のソーシャルワーカーとして働いている、という矛盾への議論も続けられてきた可能性が示唆された。

今回の出発点は、国際ソーシャルワークの先行研究の一環として始めた文献調査であった。しかし、1970年代の国際会議の報告書に収録されている記事から、インディジナス・ソーシャルワークの捉え方が、研究所が進めてきた仏教ソーシャルワークと重なる部分があることが分かった。また、パラプロフェッショナル・ソーシャルワーカーとして、仏教ソーシャルワークでも実践家としてカテゴライズしていた僧侶・信徒たちが含まれていた。アジア国際社会福祉研究所はまもなく開所10年となるが、未だ足元の大学図書館の文献研究が不十分だったことを反省し、ここに記録として残しておきたい。

## 結びにかえて

今回レビューした図書の多くは、値段が記載されていない。これらの図書がどのような経緯で淑徳大学図書館に所蔵されるようになったのか。なぜ1970年代の図書に限定されているのだろうか。疑問はまだ残っている。図書館が独自に購入したのではなく、教員による寄贈図書である可能性も否めない。日本が初めてIASSW、ICSW、IFSWの国際会議を開催したのは1986年である。通常、その2年前に開催される国際会議で次回開催地が発表されることから、開催国として準備していた教員たちが入手していた可能性がある。あ

るいは、1986年の東京会議でIASSWが展示、提供した資料の一部である可能性もある。海外に関心のある教員だったのか、あるいは日本の社会福祉の国際化に関心があったのか。いずれにしても、これらの貴重な資料が、現代になって、世界でも例を見ない「国際社会福祉研究所」を附置する淑徳大学の図書館で見つかった、というのは興味深い。おそらく、同じような貴重な資料が、日本の社会福祉系の大学 (schools of social work) の図書館に、保管されている可能性は高い。

他方で、アジア国際社会福祉研究所の発行した文献が収蔵されていないというのは、寂しい感がある。研究所の知見は研究所だけが収蔵するのではなく、図書館でも広く公開していただけるようになると、研究所の目的である「研究成果の社会還元」の一助となるだろう。

## 付録：1970年代の国際会議報告書からうかがえること

この時代は、世界史の中でも「アフリカの年」と呼ばれるように、アジア太平洋、アフリカ圏域で旧植民地から独立した新興国が増えた時期である。また、スリランカで農業改革が進められたように(ヘラ, et al. 2019)、人口問題や過剰な化学肥料投与による環境汚染が深刻な課題となっていた。さらに、アジア太平洋地域をはじめ、IASSWから地域連盟が生まれ始めた時期である。また、専門職教育 (professional) が進められていったが、他方で、「第一線で活動するパラプロフェッショナル (paraprofessional)」育成プログラムについても、繰り返し議論があった。ソーシャルワーク教育の土着化 (indigenization) という言葉も、IASSWの刊行物の中にたびたび登場していた。

以下、未来の研究所における研究活動に寄与することを願って、「土着化」と「パラプロフェッショナルの育成」について付録として記載する。

### 土着化 (indigenization)

1972年8月にオランダ・ハーグで開催された国際会議 (International Congress of schools of Social Work) の報告書には、後にアジア圏域ソーシャルワーク教育校 (ARASWE) 初代会長となる、Armaity S. Desaiによるペーパー「Curriculum Development」が収録されていたほか、Shimon Spiroが報告者となった「Principles of Curriculum Construction and Development in Curriculum Organization: Rapporteur's Report」や、Sattareh Farman-Farmaianによる「Case Study on the Role of Social Work education in Family Planning」が収録されていた。いずれも、ARASWE初期の理事たちである。(IASSW 1973)

また、当時IASSW会長だったHerman Steinは「インディジナイゼーションの時代に入っている」と述べ、アジアの文脈以外のindigenizationについて、下記のように発言していた。

西欧諸国におけるソーシャルワークのindigenizationもまた興味深い点であり、各国の事情に応じて重点が異なっている。事実上すべての国において、国の人材ニーズに関連した研修や、いわゆる「専門」教育を受けた人材だけでなく、様々なレベルの人材が社会福祉に貢献する可能性についても関心が寄せられている。」(Stein 1973)<sup>iii</sup>

また、Steinは価値観 (values) についても、次のように述べていた。

価値観全般について書かれたものは数多くあるが、ソーシャルワークが、普遍的かつ特異な形で、自らの価値観と呼んでいる個々の価値観については、明確に述べられていない。しかし、人文主義的価値観の混ざり合った中に、「ソーシャルワーク」を象徴する特別なパターンがある、という漠然とした感覚が

伴っている。こうしたアプローチに対する漠然とした不快感から、一部のソーシャルワーク教育者は、哲学教育者に、専門哲学者の視点からソーシャルワークの想定される価値観を厳しく検証し、様々な探究を行うよう促している。ソーシャルワーク教育者が価値観について語る時、私たちは独自の世界の中にいる。そのため、想定される価値観を、外部から検証することは、有益であろう。(Stein 1973)<sup>iv</sup>

つまり、ソーシャルワークの独自のサークルで語られる「価値観」が、哲学本来が持つ「価値」とは異なるのではないかという批判である。

会議はディスカッショングループに分かれ、各テーマで話し合われた。グループEは、司会 (Chairman) はスイスのDieter Hanhart、記録者はオーストリアのAudrey Rennisonであり、日本からの参加者も議論の場にいたとの記録がある。ここでは、“Indigenous material”に関する議論として、以下の記述があった。

この問題については10年～12年も議論されてきたにもかかわらず、世界の多くの地域で、インディジナスな教材の提供がほとんど進んでいないという懸念が表明された。そのため、当然のことながら、他国から移植された社会科学の内容の多くは、関連性が限られていたり、先住民 (indigenous people) の価値観や信念と矛盾したりする可能性がある。」(p.120)

他方で、フィリピンのThelma Lee-Mendozaが司会したディスカッション・グループF<sup>v</sup>では、ディスカッションのタイトルを「ソーシャルワーク教育へのインディジナスなアプローチ (indigenous approaches to social work education)」(pp.122-124)であった。<sup>vi</sup>フィリピンをはじめアジアの研究者たちは、ソーシャルワーク教育のインディジナスなアプローチや教材開発、カリキュラムについて議論を重ねていた。例えば、1973年11月にシンガポールで開催されたセミナーの報告書には、地域連盟設立に貢献したフィリピンのAngelina Almanzorがプログラム・コミッティ委員長であったという記述がある。(IASSW 1974)

インディジナスについては、1977年2月にケニア・ナイロビで開催された、第2回アフリカ・サブリージョナル・セミナー「Family welfare as a development strategy」の報告書。第1回はガーナのアクラで1976年に開催された。ナイロビ大学の教授Philip M. Mbithiは次のように述べていた。

東アフリカにおけるソーシャルワークの実践は、ボランティア・プログラムの重要性、主要ポストへのベテラン・ボランティアの配置、都市部へのサービスの集中、そして博愛主義の哲学の優位性など、依然として英国のアプローチの影響を受けている。しかしながら、最も土着的な (indigenous) 社会統制と相互扶助のシステムが、小さなコミュニティの中に根づいている。」として、ソーシャルワーク教育で再評価される必要があるべきである。(Mbithi 1978)

## パラプロフェショナルの育成

ソーシャルワーク教育の伝播とともに、「パラプロフェショナルの育成」も取り上げられていた。「Short-term training for social development: the preparation of front-line workers and trainers」の「Forward」で、以下の記述がある。

しかしながら、第一線 (front-line) のソーシャルワーク従事者の養成を、現代のソーシャルワーク教育の観点からのみ捉えたり、第一線の職員を「専門職」ソーシャルワーカーの下位レベルとみなしたりするのは、大きな誤りである。第一線のソーシャルワーク従事者の職務の多様性と要求を研究・分析し、彼ら

の職務における人間関係の本質を抽出し、国家の発展への貢献を最大化するための適切な研修・教育戦略を策定することが有益であろう。」と指摘していた。(Rigby 1978)

また同書の編者Rigbyは、パラプロフェッショナルな人々の範囲として以下の人々を挙げた。

農村開発アシスタント、コミュニティ開発アシスタント、成人教育アシスタント、保健教育アシスタント、福祉アシスタント、家庭生活教育者、家族計画現場教育者、医療助手および医療アシスタント、政府サービス従事者、警察官、先住のワーカー、家族計画従事者またはモチベーター、直接サービス従事者、識字補助員、農業普及員、ボランティア、労働組合員、村の指導者、女性労働者、青少年アシスタントまたは青少年団、僧侶、尼僧、司祭、その他の教会従事者」(Rigby 1978)<sup>vii</sup>

#### 参考文献

- Friedlander W. A. (1975) International social welfare, Prentice-Hall.
- Hokenstad M. C. and Rigby B. (1977) Participation in Teaching and Learning: an idea book for social work educators, International Association of Schools of Social Work.
- IASSW (1973) New themes in social work education: Proceedings of the 15th International Congress of Schools of Social Work, Hague, The Netherlands August 8-11,1972, IASSW.
- IASSW (1974) A Developmental Outlook for social work education: a report of a seminar on “maximising social work potentials for family planning and population activities” held in Singapore, November 5-15,1973, IASSW.
- IASSW (1975) Education for social change: human development and national progress, IASSW.
- IASSW (1977) People & Places: social work education and human settlements, IASSW.
- IASSW (1978) Family Welfare in Africa, IASSW.
- IASSW (1995) IASSW Directory, IASSW.
- IASSW (1995, reprinted in 2002) IASSW Directory, IASSW.
- International Congress of Schools of S. W. and International Association of Schools of Social Work C. (1977) Social realities & the social work response, International Association of Schools of Social Work.
- Kendall K. A. (1978) Reflections on social work education, 1950-1978, International Association of Schools of Social Work.
- Mbithi P. M. (1978) Family Welfare as a component of development Ankra E. M. ed. Family Welfare in Africa, 21-39.
- Midgley J. (1981) Professional imperialism: Social work in the third world, Heinemann London.
- Oettinger K. B. and Stansbury J. D. (1972) Population and family planning: analytical abstracts for social work educators and related disciplines: a reader’s guide to the Reference bookshelf for schools of social work, IASSW.
- Pangalangan E. A. and Pineda J. D. (n.d.) Casebook on a two-country experience of social work practice in family planning and population education : sixteen (16) case studies, IASSW.
- Rao V., Kendall K. A., Stickney P. J., et al. (1984) World guide to social work education Vol. pbk., Published by the Council on Social Work Education for the International Association of Schools of Social Work.
- Rigby B. (1978) Short-term training for social development: the preparation of front-line workers and trainers, IASSW.
- Stein H. D. (1973) Cross-National themes in social work education: a commentary on the sixteenth IASSW Congress. New themes in social work education: proceedings of the XVIth International Congress of Schools of Social Work, IASSW, 155-64.
- Stickney P. J. and Resnick R. P. (1974) World Guide to Social Work Education, International Association of Schools of Social Work (IASSW).
- ヘラ H. M. D. R. and 松尾 加. (2019) スリランカにおけるグリーンソーシャルワークの理論と実践 (特集 グリーンソーシャルワーク/環境ソーシャルワーク)、ソーシャルワーク研究：社会福祉実践の総合研究誌、45 (2), 131-41.

## 脚注

- i 合計数が112件となり、文件数と合致しない。
- ii 1971年の報告書は“Training for Social Welfare: Fifth International Survey”というタイトルで発行された。
- iii 和訳は筆者による。
- iv 和訳は筆者による。
- v ディスカッションFも、参加者に日本との記述があった。
- vi ディスカッションFの記録者は国連の記録者は、E.Q.Blavoであった。
- vii 下線は筆者による。

## 【活動報告】

### 1. 設 立

#### (1) アジア仏教社会福祉学術交流センター（2014年4月1日設立）

2014年4月1日、淑徳大学長谷川仏教文化研究所（長谷川 匡俊所長）の中に秋元 樹（元アジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟〈APASWE〉会長、元国際ソーシャルワーク学校連盟〈The International Association of Schools of Social Work〈IASSW〉副会長、日本女子大学名誉教授）を迎えて、アジア仏教社会福祉学術交流センター（Asian Center for Social Work Research：以下、センターと略す）が誕生した。

このセンターのミッションは二つであり、その一つはアジア—仏教—社会福祉のネットワークを構築し、アジアにおける仏教ソーシャルワーク研究のハブとなること。二つ目は国際ソーシャルワーク研究を進めることを通して、アジアと世界の社会福祉研究教育の発展に寄与することである。また、このミッションのもとで9分野（1. 国際共同研究 2. 国際会議・セミナー・ワークショップ等の開催 3. 人的・組織的交流 4. 人材養成への協力 5. 研究会の組織 6. 図書・文献資料の収集・提供 7. 国際組織への貢献 8. 他国大学へのサポート 9. 書籍・報告書等の出版）の活動を開始した。これらは、その後に開設されるアジア国際社会福祉研究所（以下、研究所と略す）に引き継がれることとなった。

また、センターから研究所設置へ向けて、2015年7月8日に法人本部から理事長、常務理事、事務局長が、大学から学長（代理副学長）、大学事務局長ほかの出席による会議（池袋）で、所長・総括研究員・研究スタッフ（専任2名）・事務スタッフ（専任1名）、センター長+数名の非常勤スタッフの体制を含めた大枠の承認がなされた。これにより、2015年10月1日に研究員1名を採用した。研究所設立に向けては、設立準備室等は用意されなかったが、研究所規程等は2016年4月に向けて整備された。

#### (2) アジア国際社会福祉研究所（2016年4月1日設立）

2016年4月1日、学部等には属さない学長直属の研究機関としてアジア国際社会福祉研究所（以下、研究所と略す）（Asian Research Institute for International Social Work〈ARIISW〉）が設立された。スタッフは研究所所長、アジア仏教社会福祉学術交流センター（以下、センターと略す）長（所長兼務）、研究員3名、専任事務職なしの体制で活動を開始した。また、センターは、長谷川仏教文化研究所から当研究所内に移管した。当面センターは独自のスタッフを置かず、研究所スタッフが双方の業務に携わることとした。事務スタッフは、4月1日に臨時職員1名、5月1日に専任事務職員1名（兼務：管理職）の配置があった。6月1日に専任事務職員1名を増員したが、翌年度に新設される部署の職員として採用されたもので、翌年4月にそちらに異動した。また、2017年1月に派遣スタッフ1名を増員した。

研究所のミッションは、国際ソーシャルワーク研究を通してアジア、世界のソーシャルワークの前進に貢献すること。センターのミッションは、そのうちのアジアを場として仏教ソーシャルワーク研究に特化し、そのハブとなること。活動の9分野は、前述（p.17 1. 設立（1））を継承している。

2024年度の分野別活動の詳細は、「p.36 7. 分野別活動」を参照。

### 2. 人 員

#### (1) 研究員

（名誉所長）	大乘淑徳学園学術顧問	秋元 樹
（所 長）	教 授	戸塚 法子
（所長補佐・上席研究員）	准教授	松尾 加奈
（主任研究員）	助 教	東田 全央（2024年9月30日まで）
（アジア仏教社会福祉学術交流センター長）	教 授	藤森 雄介

(2) 顧問

(最高顧問) 大乘淑徳学園 理事長 長谷川 匡俊

(顧問) 田宮 仁 石川 到覚

(3) プログラム研究員

郷堀 ヨゼフ

東田 全央 (2024年10月1日～)

井川 裕覚 (2024年11月1日～2025年3月31日、2025年4月1日よりアジア国際社会福祉研究所主任研究員)

(4) ビジティング・リサーチャー

デチャ・サンカワン (2019年7月～)

松蘭 祐子 (2021年4月～)

VR第5期 トゥメンナス・ゲレンク (2021年10月～2024年9月)

(5) リサーチ・フェロー

菊池 結 佐藤 成道 安藤 徳明

(6) アジア国際社会福祉研究所運営委員

(委員長) 教授 山口 光治

(副委員長) 教授 戸塚 法子

(委員) 教授 米村 美奈 教授 千葉 浩彦 教授 藤森 雄介

准教授 松尾 加奈 助教 東田 全央 (2024年9月30日まで)

大学事務局長 岡澤 順 研究所課長 江島 一弥

(7) 事務員

(課長) 江島 一弥

(事務員) 野中 夏奈

(事務員) 能勢 貴子

(事務員) 染谷 有紀

### 3. 年間活動記録（時系列：会議・イベント・来訪者・出張など）

2024年

- |          |   |
|----------|---|
| 4月 4日～7日 | SWSD パナマ会議出席（パナマ）（秋元、松尾、東田）                       |
| 4日       | SWSD パナマ会議分科会 口頭発表（パナマ）（東田）                       |
| 6日       | キャサリン・ケンダル賞 秋元受賞記念講演（パナマ）（秋元）<br>同受賞記念講演出席（松尾、東田） |
| 11日      | 第1回所員会議   |
| 15日      | 「アジア国際社会福祉研究所から通信」No.61 刊行                        |
| 25日      | 第2回所員会議<br>アジア国際社会福祉研究会（ハイブリッド）                   |
| 5月 7日    | 第3回所員会議   |
| 23日      | 第4回所員会議   |
| 30日      | アジア国際社会福祉研究会                                      |
| 6月 1日    | 「アジア国際社会福祉研究所から通信」No.62 刊行                        |
| 13日      | 第5回所員会議   |
| 18日      | 第1回アジア国際社会福祉研究所運営委員会（ハイブリッド）                      |
| 20日      | 第6回所員会議   |
| 29日～30日  | 日本ソーシャルワーク学会出席（松尾）                                |
| 7月 4日    | 第7回所員会議   |
| 5日       | 日本女子大学社会福祉学会プレ会議出席（松尾）                            |
| 6日       | 日本女子大学社会福祉学会出席（松尾）                                |
| 18日      | 第8回所員会議   |
| 30日      | APASWE 理事会参加（マレーシア開催）（松尾）                         |
| 8月 1日    | 第9回所員会議   |
| 4日～11日   | 多文化ソーシャルワーク研究 シドニー出張（科研）（松尾）                      |
| 29日      | アジア国際社会福祉研究会（ハイブリッド）                              |
| 9月 1日～5日 | スリランカ出張（科研）（東田）                                   |
| 5日       | 第10回所員会議  |
| 14日～15日  | 日本仏教社会福祉学会大会出席（藤森）                                |
| 19日      | 第11回所員会議  |
| 24日      | アジア国際社会福祉研究会                                      |
| 27日      | ウエスタン・シドニー大学 USP 教員とのオンライン研究会（松尾）                 |
| 10月 3日   | 第12回所員会議  |
| 17日      | 第13回所員会議  |
| 26日～27日  | 日本社会福祉学会秋季大会出席（戸塚、藤森、松尾）                          |
| 28日      | ウエスタン・シドニー大学・USP 教員とのオンライン研究会（松尾）                 |
| 31日      | 第14回所員会議<br>「アジア国際社会福祉研究所から通信」No.63 刊行            |
| 11月 7日   | 第15回所員会議  |
| 13日      | 第2回アジア国際社会福祉研究所運営委員会（ハイブリッド）                      |

- 14日 バングラデシュ国際会議 オンライン口頭発表(松尾)
- 16日～17日 日本ソーシャルワーク教育学校連盟セミナー出席(秋元、松尾)  
キャサリン・ケンダル賞 受賞記念講演(秋元、松尾)
- 20日 「アジア国際社会福祉研究所 Kara 通信」No.64 刊行
- 22日 ウェスタン・シドニー大学USP 教員とのオンライン研究会(松尾)
- 21日 第16回所員会議
- 28日 アジア国際社会福祉研究会(ハイブリッド)(松尾)
- 30日 アジア国際社会福祉研究会 学術会議(松尾)
- 12月 1日 日本ソーシャルワーク学会主催第5回公開研究会出席(松尾)
- 2日 仏教ソーシャルワーク3領域調査 オンラインセミナー開催(郷堀、藤森、井川)
- 5日 第17回所員会議
- 19日 第18回所員会議
- 19日 「アジア国際社会福祉研究所 Kara 通信」No.65 刊行
- 1月 5日 新春賀詞交歓会
- 9日～11日 国際会議 The 2nd International Conference of the ASEAN Social Work and Social Development 2025 Social Work Horizons: Charting the Path with Research and Practice 招聘(松尾)
- 14日 モンゴル視察団と研究所にてミーティング
- 16日 第19回所員会議
- 30日 第20回所員会議  
APASWE 理事会参加(オンライン)  
アジア国際社会福祉研究会
- 2月 12日 第21回所員会議
- 15日 第9回国際学術フォーラム(淑徳大学東京キャンパス)
- 16日 アベ・タッセ先生 公開研究会(日本女子大学)
- 19日～20日 日本福祉大学 出張(松尾)
- 26日 第22回所員会議
- 28日 アメリカソーシャルワーク教育協議会(CSWE)主催「Decolonizing International Social Work Education」、報告会(オンライン)参加(松尾)
- 3月 6日 「アジア国際社会福祉研究所 kara 通信」No.66 刊行
- 10日～13日 能登出張(藤森)
- 12日 第23回所員会議
- 24日 Association of Social Workers of Sri Lanka主催国際会議「インディジナス・ソーシャルワーク実践」基調講演(スリランカ)(秋元)
- 26日 第24回所員会議

## 4. 会 議（研究所内）

### (1) アジア国際社会福祉研究所運営委員会

#### ・第1回運営委員会

(日 時) 2024年6月18日(火) 12時30分～14時00分

(場 所) 1号館3階アジア国際社会福祉研究所会議スペース(ハイブリッド)

(参加者) 〈委 員〉 山口 光治 米村 美奈 戸塚 法子 千葉 浩彦 岡澤 順  
藤森 雄介 松尾 加奈 東田 全央 江島 一弥

〈顧 問〉 長谷川 匡俊 田宮 仁

〈書 記〉 野中 夏奈

(欠席者) 石川 到覚

- (議 題)
- 2023年度アジア国際社会福祉研究所活動報告
    - 2023年度アジア国際社会福祉研究所 研究事業進捗状況の報告
    - 2023年度仏教ソーシャルワーク・仏教学術交流センター事業報告
  - 2023年度アジア国際社会福祉研究所決算(案)
  - 2024年度アジア国際社会福祉研究所活動計画
    - 2024年度ARIISW目標と事業計画
    - 2024年度アジア国際社会福祉研究所 研究事業計画
    - 2024年度仏教ソーシャルワーク・仏教学術交流センター事業計画
  - 2024年度アジア国際社会福祉研究所予算(案)
  - 研究所研究員の推薦と委嘱について
  - その他

#### ・第2回運営委員会

(日 時) 2024年11月13日(水) 14時00分～16時00分

(場 所) 1号館3階アジア国際社会福祉研究所会議スペース(ハイブリッド)

(参加者) 〈委 員〉 山口 光治 米村 美奈 戸塚 法子 千葉 浩彦 岡澤 順  
藤森 雄介 松尾 加奈 江島 一弥

〈顧 問〉 長谷川 匡俊 田宮 仁

〈書 記〉 野中 夏奈

(欠席者) 石川 到覚

- (議 題)
- 2024年度研究事業進捗状況の報告
  - 第9回国際学術フォーラム広報
  - プログラム研究員の推薦と委嘱について
  - その他

### (2) 所員会議

#### ・第1回所員会議

(日 時) 2024年4月11日 12時30分～13時40分(ハイブリッド)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、東田 全央

江島 一弥、能勢 貴子、染谷 有紀

- (議 題)
1. 議事録の確認
  2. VR プログラム関連について
  3. 国際ソーシャルワーク関連について
  4. 仏教ソーシャルワー関連について
  5. 所長から
  6. 事務局より
  7. 所員による共有・確認事項

• 第2回所員会議

(日 時) 2024年4月25日 12時30分～14時45分 (ハイブリッド)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、東田 全央  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀

- (議 題)
1. 議事録の確認
  2. VR プログラム関連について
  3. 国際ソーシャルワーク関連について
  4. 仏教ソーシャルワーク関連について
  5. 所長から
  6. 事務局より
  7. 所員による共有・確認事項

• 第3回所員会議

(日 時) 2024年5月7日 12時30分～14時10分 (ハイブリッド)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 山口 光治、米村 美奈、戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、  
東田 全央、江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀

- (議 題)
1. 議事録の確認
  2. VR プログラム関連について
  3. 国際ソーシャルワーク関連について
  4. 仏教ソーシャルワーク関連について
  5. 所長より
  6. 事務局より
  7. 所員による共有・確認事項

• 第4回所員会議

(日 時) 2024年5月23日 12時30分～14時45分 (ハイブリッド)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、東田 全央  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀

- (議 題) 前回議事録の確認
1. VR プログラム関連
  2. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
  3. 所長より
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第5回所員会議

(日 時) 2024年6月13日 12時30分～14時20分 (ハイブリッド)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、東田 全央  
江島 一弥、能勢 貴子、染谷 有紀

(議 題) 前回所員会議の確認事項

1. 研究所活動報告
  - 1) 国際学術フォーラム
  - 2) 人的・組織的交流
  - 3) 資料収集
  - 4) 研究会
  - 5) 他大学との交流・協力
  - 6) 国際組織・国内組織への貢献
  - 7) 出版
  - 8) 国際共同研究
  - 9) 人材養成
  - 10) 研究成果発信
  - 11) 研究基盤形成
  - 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連
3. 所長より
4. 事務局より

## 5. 所員による共有・確認事項

### ・第6回所員会議

(日 時) 2024年6月20日 11時00分～12時15分 (対面)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、松尾 加奈、東田 全央  
江島 一弥、野中 加奈、染谷 有紀

- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

### ・第7回所員会議

(日 時) 2024年7月4日 12時30分～14時00分 (ハイブリッド)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、東田 全央  
江島 一弥、野中 夏奈、染谷 有紀

- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成

- 10) 研究成果発信
- 11) 研究基盤形成
- 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連
3. 所長から
4. 事務局より
5. 所員による共有・確認事項

・第8回所員会議

- (日 時) 2024年7月18日 12時30分～14時15分 (ハイブリッド)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、東田 全央  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第9回所員会議

- (日 時) 2024年8月1日 13時00分～14時30分 (ハイブリッド)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、松尾 加奈、藤森 雄介、東田 全央  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集

- 4) 研究会
  - 5) 他大学との交流・協力
  - 6) 国際組織・国内組織への貢献
  - 7) 出版
  - 8) 国際共同研究
  - 9) 人材養成
  - 10) 研究成果発信
  - 11) 研究基盤形成
  - 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第10回所員会議

- (日 時) 2024年9月5日 12時30分～14時30分 (ハイブリッド)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子
- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第11回所員会議

- (日 時) 2024年9月19日 12時30分～13時15分 (ハイブリッド)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈、東田 全央  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀

- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第12回所員会議

(日 時) 2024年10月3日 12時30分～13時35分 (ハイブリッド)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈  
江島 一弥、能勢 貴子、染谷 有紀

- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から

4. 事務局より
5. 所員による共有・確認事項

・第13回所員会議

- (日 時) 2024年10月17日 12時30分～14時30分(対面)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第14回所員会議

- (日 時) 2024年10月31日 12時30分～13時15分(ハイブリッド)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究

- 9) 人材養成
- 10) 研究成果発信
- 11) 研究基盤形成
- 12) その他
- 2. 仏教ソーシャルワーク関連
- 3. 所長から
- 4. 事務局より
- 5. 所員による共有・確認事項

• 第15回所員会議

- (日 時) 2024年11月7日 12時30分～13時30分 (対面)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題)
- 1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  - 2. 仏教ソーシャルワーク関連
  - 3. 所長から
  - 4. 事務局より
  - 5. 所員による共有・確認事項

• 第16回所員会議

- (日 時) 2024年11月21日 (木) 12:30～14:00 (ハイブリッド)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題)
- 1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流

- 3) 資料収集
  - 4) 研究会
  - 5) 他大学との交流・協力
  - 6) 国際組織・国内組織への貢献
  - 7) 出版
  - 8) 国際共同研究
  - 9) 人材養成
  - 10) 研究成果発信
  - 11) 研究基盤形成
  - 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第17回所員会議

- (日 時) 2024年12月5日 10時00分～11時40分 (対面)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第18回所員会議

- (日 時) 2024年12月19日 12時30分～14時30分 (ハイブリッド)

- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題) 1. 研究所活動報告
- 1) 国際学術フォーラム
  - 2) 人的・組織的交流
  - 3) 資料収集
  - 4) 研究会
  - 5) 他大学との交流・協力
  - 6) 国際組織・国内組織への貢献
  - 7) 出版
  - 8) 国際共同研究
  - 9) 人材養成
  - 10) 研究成果発信
  - 11) 研究基盤形成
  - 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連
3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第19回所員会議

- (日 時) 2025年1月16日 12時30分～14時10分 (ハイブリッド)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、染谷 有紀
- (議 題) 1. 研究所活動報告
- 1) 国際学術フォーラム
  - 2) 人的・組織的交流
  - 3) 資料収集
  - 4) 研究会
  - 5) 他大学との交流・協力
  - 6) 国際組織・国内組織への貢献
  - 7) 出版
  - 8) 国際共同研究
  - 9) 人材養成
  - 10) 研究成果発信
  - 11) 研究基盤形成
  - 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連

3. 所長から
4. 事務局より
5. 所員による共有・確認事項

・第20回所員会議

(日 時) 2025年1月30日 12時30分～15時00分 (ハイブリッド)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀

- (議 題)
1. 研究所活動報告
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第21回所員会議

(日 時) 2025年2月12日 10時30分～13時30分 (対面)

(場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース

(参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈  
江島 一弥、野中 夏奈、能勢 貴子

- (議 題)
1. 第9回国際学術フォーラム企画進捗、前後の企画について
  2. 仏教ソーシャルワーク関連
  3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第22回所員会議

(日 時) 2025年2月26日 10時30分～12時30分 (対面)

- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、藤森 雄介、松尾 加奈  
野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題) 1. 研究所活動報告
- 1) 国際学術フォーラム
  - 2) 人的・組織的交流
  - 3) 資料収集
  - 4) 研究会
  - 5) 他大学との交流・協力
  - 6) 国際組織・国内組織への貢献
  - 7) 出版
  - 8) 国際共同研究
  - 9) 人材養成
  - 10) 研究成果発信
  - 11) 研究基盤形成
  - 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連
3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

・第23回所員会議

- (日 時) 2025年3月12日 10時30分～12時20分 (対面)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、松尾 加奈  
野中 夏奈、能勢 貴子、染谷 有紀
- (議 題) 1. 研究所活動報告
- 1) 国際学術フォーラム
  - 2) 人的・組織的交流
  - 3) 資料収集
  - 4) 研究会
  - 5) 他大学との交流・協力
  - 6) 国際組織・国内組織への貢献
  - 7) 出版
  - 8) 国際共同研究
  - 9) 人材養成
  - 10) 研究成果発信
  - 11) 研究基盤形成
  - 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連

3. 所長から
4. 事務局より
5. 所員による共有・確認事項

・第24回所員会議

- (日 時) 2025年3月21日 10時30分～12時30分 (対面)
- (場 所) アジア国際社会福祉研究所 会議スペース
- (参加者) 戸塚 法子、松尾 加奈  
江島 一弥、能勢 貴子
- (議 題) 1. 2025年度研究所活動について
- ・組織新体制報告
  - ・業務分掌策定スケジュール
  - ・研究所活動の方向性・グランドデザイン案および下記活動の目標設定とスケジュールの検討会議の提案
    - 1) 国際学術フォーラム
    - 2) 人的・組織的交流
    - 3) 資料収集
    - 4) 研究会
    - 5) 他大学との交流・協力
    - 6) 国際組織・国内組織への貢献
    - 7) 出版
    - 8) 国際共同研究
    - 9) 人材養成
    - 10) 研究成果発信
    - 11) 研究基盤形成
    - 12) その他
2. 仏教ソーシャルワーク関連報告と2025年度活動へのコメント
3. 所長から
  4. 事務局より
  5. 所員による共有・確認事項

## 5. 出張

### (1) パナマ

- (日 時) 2024年4月3日～4月10日
- (場 所) パナマ
- (出張者) 秋元 樹 松尾 加奈 東田 全央
- (目 的) ソーシャルワーク・教育・社会開発合同世界会議 (SWSD パナマ会議) 出席  
キャサリン・ケンダル賞授賞式、受賞記念講演 (秋元)  
SWSD パナマ会議分科会 口頭発表 (東田)

(2) マレーシア

(日 時) 2024年7月29日～8月1日  
(場 所) クアラルンプール  
(出張者) 松尾 加奈  
(目 的) APASWE理事会出席

(3) オーストラリア

(日 時) 2024年8月4日～8月11日  
(場 所) シドニー  
(出張者) 松尾 加奈  
(目 的) 日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (B)「グローバル・ソーシャルワークによる多文化地域共生社会の構築」(23K22199 研究代表者：和気純子) 関係者ヒアリング、ワークショップ等

(4) スリランカ

(日 時) 2024年9月1日～9月5日  
(場 所) コロンボ (国立社会開発院)、アヌラダプラほか  
(出張者) 東田 全央  
(目 的) 「もう一つの実践知の探究」ワークショップ、関係者ヒアリング等

(5) タイ

(日 時) 2025年1月7日～1月11日  
(場 所) バンコック  
(出張者) 松尾 加奈  
(目 的) 香港理工大学主催 第2回ASEANソーシャルワーク・社会開発国際会議2025「ソーシャルワークの地平：研究と実践をつなぐ道」Social Work Horizons: Charting the Path with Research and Practice 招聘

(6) 京都府、長野県

(日 時) 2025年1月29日～1月31日  
(場 所) 京都府、長野県  
(出張者) 藤森 雄介  
(目 的) 全日本仏教会「新年懇談会」出席、龍谷大学栗田教授との面談など

(7) 愛知県

(日 時) 2025年2月19日～2月20日  
(場 所) 日本福祉大学名古屋キャンパス  
(出張者) 松尾 加奈  
(目 的) APASWE会計担当理事補助業務

## (8) 石川県

- (日 時) 2025年3月10日～3月13日  
(場 所) 石川県能登半島 法船寺、大蓮寺、長光寺等  
(出張者) 藤森 雄介  
(目 的) 宗派、寺院、僧侶の福祉的実践活動の動向調査

## (9) 香川県

- (日 時) 2025年3月17日～3月19日  
(場 所) 香川県高松市 児童福祉ソーシャルワーカー宅、キリスト教会、キリスト教系実践団体  
(出張者) 戸塚 法子  
(目 的) アジア研究所調査に関わる情報収集、打ち合わせのため

## 6. 来訪者

2025年1月14日 モンゴルより訪問団来訪 (モンゴル国立大学Batkhishig Adilgish教授はじめ5名)

## 7. 分野別活動

### (1) 国際共同研究

海外の大学、研究者等との国際共同調査及び研究を計画、組織、実施するとともに他国からの同様の呼びかけに応え積極的に参加する。

- 1 令和3年度基盤研究(B)「アジアにおける国際ソーシャルワーク教育(再)構築のための共同調査研究」(松尾・東田・戸塚・藤森)
- 2 仏教ソーシャルワークの探求型／実証型研究(通称：3領域調査)(藤森・郷堀(プログラム研究員))
- 3 仏教ソーシャルワークの探求(藤森)
- 4 脱植民地化・インディジナス・スピリチュアリティ・仏教ソーシャルワーク書籍プロジェクト(通称：DISBプロジェクト)(松尾)
- 5 令和5年度研究基盤研究(B)「グローバル・ソーシャルワークによる多文化地域共生社会の構築」(松尾)
- 6 令和3年度国際共同研究強化(B)「スリランカにおける障害児の教育的包摂：社会的文脈に即した包摂モデルの構築に向けて」(東田)
- 7 令和4年度基礎研究(C)「日本におけるマイノリティ集団間の複合と相克に関する当事者団体からの聞き取り研究」(東田)
- 8 令和6年度若手研究「ソーシャルワーカーの国際的・互恵的交流に関する理論的および実践的研究」(東田)

### (2) 国際会議・セミナー・ワークショップ

国際会議・セミナー・ワークショップ等を開催し、国内外で行われるそれらにもスタッフが参加、講演、報告等発信に努める。

- 1 2024年4月4日 SWSD パナマ会議分科会「ポストコロニアル・脱植民地主義・先住民・開放的アプローチ」にて口頭発表「Exploring alternative discourses on social work practices from the perspective of social representation theory (ソーシャルワーク実践に関するもう一つの言説の探究)」(東田)

- 2 2024年4月6日 SWSD パナマ会議にてキャサリン・ケンダル賞 受賞記念講演(秋元)
- 3 2024年7月30日 APASWE 理事会参加(マレーシア)(松尾)
- 4 2024年9月1日～5日 「もう一つの実践知の探究」ワークショップ、国際会議発表(東田)
- 5 2024年11月14日 World Social Work Day 国際会議(バングラデシュ) オンラインにて口頭発表(松尾)
- 6 2024年12月2日 仏教ソーシャルワーク3領域調査オンラインセミナー(藤森、郷堀)
- 7 2025年2月15日 第9回国際学術フォーラム(戸塚、藤森、松尾)(プログラム研究員:郷堀、井川)  
(p.42 9. 国際会議(3) 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所第9回国際学術フォーラムを参照)
- 8 2025年2月16日 アベ・タッセ先生(第9回国際学術フォーラムゲストスピーカー) 公開研究会開催  
(藤森、松尾)
- 9 2025年3月24日 Association of Social Workers of Sri Lanka 主催国際会議「インディジナス・ソーシャルワーク実践」基調講演(秋元)

### (3) 人的・組織的交流

研究ネットワークを拡げ、世界各地の大学・研究機関・NGO 機関及び研究者・実践者たちとの意見交換・共同プロジェクト等を実施する。

- 1 ウェスタン・シドニー大学リンブル・メータ博士並びにシャーロット・トゥサシルベ博士が主宰する「ソーシャルワーク教育の国際化に関する4か国調査」(仮題)(松尾)
- 2 2024年6月30日 日本ソーシャルワーク学会海外登壇者のアテンド(都立大学南大沢キャンパス、品川・ソ教連)(松尾)
- 3 2024年11月15～17日 ソ教連セミナー海外登壇者へのアテンド、秋元のキャサリン・ケンダル賞受賞記念講演、懇親会司会進行。(東洋大学赤羽台キャンパス)(松尾)
- 4 2024年11月14～16日、ピープルズ・ユニバーシティ・オブ・バングラデシュ主催「第7回WSWD 国際会議」基調講演・口頭発表(松尾)
- 5 2025年1月7～11日 第2回ASEAN ソーシャルワーク・社会開発国際会議(Mandarin Bangkok Hotel) に出席、口頭発表。仏教ソーシャルワーク研究ネットワークのメンバーとの意見交換や国際共同研究の可能性についてASEAN 諸国の研究者と交流した(松尾)
- 6 2025年1月14日 モンゴル視察団来訪。研究所にてミーティング開催。(戸塚、松尾)
- 7 同上国際会議発表アブストラクトの査読協力。(松尾)

### (4) 人材養成

アジア諸国の“ソーシャルワーカー”、社会福祉人材養成のニーズに応えたプログラム開発・運営をする。  
(p.38 8. ビジティング・リサーチャー論博プログラムを参照)

### (5) 研究会の開催

- 1 ソーシャルワークの原論等をテーマに、定期的にアジア国際社会福祉研究会を実施した。  
2024年4月25日、5月30日、6月27日、7月25日、8月29日、9月24日、11月28日、2025年1月30日、3月27日

### (6) 資料収集

- 1 主に国際社会福祉及び仏教ソーシャルワーク活動に関する資料収集・整理・管理をする。(p.45 10. 収集資料を参照)

## (7) 国際組織への貢献

国際ソーシャルワーク学校連盟 (IASSW)、アジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟 (APASWE) 等の国際組織の活動・運営へ積極的に関与・貢献・協力をする。

- 1 APASWE 理事会出席、理事選挙候補者選定委員会、委員長選出 (11月5日～7日) (松尾)
- 2 アジア仏教ソーシャルワーク研究ネットワーク運営「International Journal of Buddhist Social Work」vol.3 発行 (藤森・郷堀 (プログラム研究員))

## (8) 他大学への協力

国内、海外、特にアジア諸国からのニーズ・要請に応じて、ソーシャルワーク・プログラムやカリキュラムの新設、講師派遣その他に積極的に協力する。

- 1 モンゴル国立大学の新しい研究機関 (Social Work Innovation, Experimentation and Research Center) から1月に来訪あり、2025年度に開催されるオープンマインド・モンゴリアに向けて協力要請があった。

## (9) 出版物

国際共同調査及び研究の成果報告書を中心に、書籍や冊子を出版する。出版物は、「p.46 13. 資料 (1) 出版物」を参照。

## (10) 研究成果発信

- 1 淑徳大学学術機関リポジトリ登録
  - ・歴史・教育・実践を通して仏教ソーシャルワークを考える～モンゴルの場合
  - ・仏教とSDGs (ワークショップ報告書)
  - ・International Journal of Buddhist Social Work vol.3

## 8. ビジティング・リサーチャー論博プログラム

### (1) 概要

「ビジティング・リサーチャー論博プログラム (奨学金付き)」は、アジア諸国の大学が抱える質の高いソーシャルワーク教員養成のニーズに応えるべく、主にアジアの大学に所属する教員・研究者・実践家を対象とし、博士論文を書き上げる準備のある者を当研究所にビジティング・リサーチャー (以下、VRと略す) として招聘、日本滞在費用や研究に係る奨学金を支給するプログラムである。学位を取得したVR達は、帰国して自国のソーシャルワーク教育の後継者となる人材育成に寄与するという長いタイムスパンを以て淑徳大学へ貢献していただくことを目的とした。本プログラムは、2016年に研究所設立と同時に始まり、2023年まで毎年度募集・選考を実施してきた。来日したVRたちは、研究所の一員として迎え入れられ、大学院総合福祉研究科の協力と貢献により、2019年9月に1名、2022年3月に2名、合計3名の淑徳大学から「博士 (社会福祉学)」学位を授与された。

プログラム趣旨に対する国内外の評価は高く毎年応募者を多数集めてきた。しかし、①VRが設定するテーマが日本の社会福祉学の枠組みと必ずしも合致していないことや、②日本独特の「論文博士制度」、すなわち、指導教授がいない中で研究の集大成となる論文を作成し、学位請求審査申請という仕組みが、海外VRには理解が難しい等、研究所のみの努力による解決が難しい課題が浮き彫りになった。研究所は毎年プログラムのマイナーチェンジを重ねて実施してきたが、2021年度以降、独立した選考委員会はVRを選出しな

った。これは、上記2点の課題に加え、③論文審査学位授与機関が求める社会福祉学の学位論文としてのテーマ性と応募者の希望の乖離、④論文博士制度のみならず日本の大学において博士号審査請求論文が求める厳格な論文の質と研究方法の習得は、プログラムが設定した「受入期間3年、日本滞在期間2年」という限定された期間では相当な努力を持ってしても難しいという現実も、その背景にあると考えられる。

本プログラムに応募してきたアジアの候補者たちの多くは、プログラム想定よりも若い世代であり、短期間日本に滞在可能な職位であったり、研究実績十分でかつ学位取得に向けた研究意欲が旺盛であったり、という研究者たちであった。募集要項には、論文博士の制度の説明を繰り返していたものの、論文執筆にあたっては、それでも指導を求める声が多数あった。また応募時の研究計画は日本の社会福祉学の枠組みを越えた興味深く、斬新かつ多様なテーマやアイデアが多く見られた。

上記の4点の課題や要因を踏まえ、研究所は所内および運営委員会で検討した結果、2024年度は「ビジティング・リサーチャー論博プログラム（奨学金付き）」の募集を停止した。また、学位取得を目標としない「海外訪問研究員プログラム（研究奨励金付き）」の実施にむけた計画が検討された。

## (2) ビジティング・リサーチャー実績

### 2016年度 第1期VR 学位取得（2019年9月）

(氏名) ワンワディ・ポンポクシン (Wanwadee Poonpoksin)

(国籍) タイ

(所属大学・職位) タマサート大学社会福祉学部准教授

(論文題目) タイにおけるミャンマー非熟練移住労働者のソーシャル・ウェルビーイング：バンコク首都圏データに基づく研究

Social Well-being Situations of Unskilled Myanmar Migrant Workers in Thailand: A Data-Driven Study of Bangkok Metropolitan Region

### 2017年度 第2期VR 学位取得（2022年3月）

(氏名) デチェン・ドマ (Dechen Doma)

(国籍) ブータン

(所属大学・職位) ブータン王立大学 上級講師

(論文題目) ブータンの青年の薬物乱用に対する仏教的・西洋的アプローチの接合（<sup>インターフェイス</sup>接点）にて：機関による実践<sup>トリートメント</sup>及びその効果に対するクライアントの理解の比較を踏まえて

AT THE INTERFACE OF BUDDHISM AND WESTERN APPROACHES TO YOUTH SUBSTANCE ABUSE IN BHUTAN: A COMPARISON OF CLIENT AND AGENCY UNDERSTANDING OF TREATMENT AND EFFECTIVENESS

### 2018年度 第3期VR

該当者なし

### 2019年度 第4期VR 学位取得（2022年3月）

(氏名) オマルペ・ソマナンダ (Omalpe Somananda)

(国籍) スリランカ

(所属大学・職位) 佛教パーリ語大学 上級講師

(論文題目) 仏教ソーシャルワーク教育開発のための仏教教義の適用可能性に関する分析調査  
An Analytical Study on Applicability of Teachings in Buddhism for the Development of Buddhist  
Social Work Education

**2020年度 第5期VR 学位論文執筆中**

(氏名) トゥメンナス・ゲレンク (Tumennast Gelenkhuu)

(国籍) モンゴル

(所属大学・職位) モンゴル国立大学 准教授

(プログラム開始) 2021年10月1日(オンライン)

(来日) 2022年7月

(帰国) 2023年9月

(研究テーマ) コミュニティ・ソーシャルワークにおける異文化適応力～モンゴル遊牧民の場合～  
Cultural Competence in Social Work with Communities: In the Case of Mongolian Nomadic  
Community

(進捗記録等)

「(3) 2024年度現況 1 現行「ビジティング・リサーチャー論博プログラム(奨学金付き)」について」  
を参照されたい。

**2021年度 第6期VR**

該当者なし

**2022年度 第7期VR**

該当者なし

**2023年度 第8期VR**

該当者なし

**(3) 2024年度現況**

**1 現行「ビジティング・リサーチャー論博プログラム(奨学金付き)」について**

2024年度の新規募集を停止したことは前述のとおりであるが、第5期VRトゥメンナス・ゲレンク先生が在籍していた。当初の約束では、2023年9月に帰国した後に、博士論文草稿の執筆を続け、研究所を通じて提出することになっていた。しかし、帰国後本務校での業務が加重されたこともあり、学位取得に向けての進行が遅れている。以下時系列に現況を記録する。

2024年 3月 本人の、研究科在籍の研究生期間が終了した。

4月1日 研究所所長が、VRとしての受入終了期日(9月30日)を本人に通知した。帰国時から、草稿提出期限の延期の申し出が4回あったことを受け、改めてVRの確認事項を明示した。具体的には、VRプログラムとしても草稿提出がない場合の奨学金返還の可能性、博士論文審査の厳格性の再確認、大学院や研究所に在籍したことが、必ず学位が取得できることにつながるわけではないこと、である。

6月6日 本人は、VRプログラム成果物としての博士論文草稿を研究所に提出した。また、予備

審査へ提出する完成論文草稿は研究員からのコメントをもって準備したいと、本人から希望があった。

7月 研究員が、本人の希望に沿ってコメントを返した。コメントとは、指導や論文審査には関与しない、同僚としての助言、アドバイスの性格をもつ。これについても本人からの了承を得た。

9月30日 VRプログラムとしての受け入れ期間が終了した。

11月 本人から、完成論文草稿と予備審査願を提出したい、との連絡があった。

12月13日 本人から研究所宛に完成した論文草稿と予備審査願を含む必要書類が届けられた。これら必要書類について、研究所が本人代理で、研究科に提出した。

2025年 1月23日 審査委員会にて審査が行われたが「不合格」となった。その通知が研究所並びに本人になされた。

3月10日 本人から、草稿修正と予備審査の再審査申請の希望が示された。

3月下旬、研究科長と本人の面談がオンラインでなされたとの報告が研究科からあった。本人からは、「可能であれば2025年11月予備審査再提出を目指したい」との意向が示された。併せて、4月中旬に執筆計画提示の予定が示された。

## 2 新規「海外訪問研究員プログラム（研究奨励金付き）」について

研究所は昨年度の2023年度 第2回運営委員会（2023年11月15日）において、学位取得を目標としない新しい人材養成プログラム「ビジティング・リサーチャープログラム（研究奨励金付き）」実施計画（案）を提出、運営委員会で討議された上で、さらに学内で調整をした修正案「2024年度 海外訪問研究員プログラム（研究奨励金付き）」実施計画（案）が作成された。新しい実施計画案については、運営委員長の指示により運営委員各位へ発信、運営委員会メール審議（2023年12月28日）による承認を得た。

新しい実施計画案では、研究所の主導による国境を越えた人材養成プログラムとして、VRの学術誌への投稿、セミナーや国際会議での登壇など、広く学内外、国内外に発信をしていただくような成果を期待し、さらに研究所との共同研究など協働的発展的な関係を構築できる人材を選考するプログラムデザインとなっている。募集対象は、すでに学位（Ph.D./DSW）を持つ者、シニアリサーチャーも含み、受入期間・滞在期間は現行プログラムより短縮し、よりフレキシブルに対応できるプログラムとし2024年度より実施予定であった。

しかし2023年度に専任研究員のうち「仏教ソーシャルワークをある程度理解できる者」の欠員が補充できなかったことから、「国際ソーシャルワーク」「仏教ソーシャルワーク」に関心のあるリサーチャーの募集が開始できなかった。2024年度 第1回運営委員会（2024年6月18日）では、要項を整備し10月に応募開始を目指すことが報告されたものの、委員会では研究所人員充足が見込まれなければ実施が難しい状況であることが指摘された。さらに、9月からは専任研究員が1名に減ったことから、新規「海外訪問研究員プログラム（研究奨励金付き）」は運用開始に至らなかった。

## (4) 総括

2016年度に始まった「ビジティング・リサーチャー論博プログラム（奨学金付き）」は、研究所事業である「人材養成」活動として、ビジティング・リサーチャー自身のキャリアや、本務校でのソーシャルワーク教育と研究に寄与し、研究所との共同研究、そこに関わる他研究機関や研究者との活動の活性化に貢献してきた。しかし「概要」で①から④まで挙げたように、海外の研究者たちが日本の社会福祉教育で学位取得を実現することは非常に厳しいという現実があり、研究所を大きく超えて議論しなくしては、根本的な解決は不可能で

ある。近年、研究所の活動の柱である「他国大学への協力」や「人材育成」を、いかに実現させていくのか、という問いが研究所に突きつけられている。

国際ソーシャルワークや仏教ソーシャルワークに強い関心を持つ世界の研究者たちが、研究所という資源を最大活用し、将来のソーシャルワーク教育に貢献できるような仕組みとして、「海外訪問研究員プログラム(研究奨励金付き)」が新しく検討され、ベースは完成したものの、仏教ソーシャルワーク研究担当者の不在や、研究成果の公表などの課題が残っており、2024年度も実現できなかった。

ソーシャルワーク研究者たちが、国境を越えても安定して研究成果を発表し続ける環境は、世界中を見渡しても、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所の実績以外には多くは見つからない。これは海外から来訪する研究者たちが一様に口をそろえて指摘することである。新しいビジティング・リサーチャーのプログラムは、研究所内の研究力強化にもつながり、より活発な人的・組織的交流は、淑徳大学が世界のソーシャルワーク(社会福祉)教育に大きな貢献していくことにつながる。これらは、淑徳大学で学ぶ学生たちの財産になり得るかもしれない。このことを信じ、来年度には募集可能となるよう準備を進めていきたい。

## 9. 国際会議

### (1) 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所第9回国際学術フォーラム

#### 1 概要

2025年2月15日にアジア国際社会福祉研究所主催の第9回国際学術フォーラム「仏教ソーシャルワーク探求の旅、その先へ：なぜ世界は仏教ソーシャルワークを無視できないのか」を開催、基調講演者として国際ソーシャルワーク学校連盟(IASSW)元会長アベ・タッセ先生を迎え、淑徳大学東京キャンパスにてハイブリッド方式にて実施、現地にて24名、遠隔では67名が参加した。

2024年3月に仏教ソーシャルワーク研究叢書シリーズ(英文・和文各全11巻)刊行が完結し、研究所がこれまでネットワークの研究者たちと積み上げてきた成果を踏まえ、「その先」の一步を、国内外からの参加者と議論するフォーラムとなった。本フォーラムには、日本ソーシャルワーク教育学校連盟、日本社会福祉学会、日本ソーシャルワーク学会、日本仏教社会福祉学会が後援としてご協力いただいた。

フォーラムは、まず、アジア仏教社会福祉学術交流センター長の藤森雄介により「仏教ソーシャルワーク探求の旅、途上の報告～説明趣旨にかえて～」との報告がなされ、仏教ソーシャルワーク研究萌芽から今日までの経緯と、研究所がなすべき今後の課題について説明された。その後、国際ソーシャルワーク学校連盟(IASSW)元会長アベ・タッセ氏による基調講演「国際ソーシャルワークは脱グローバル化するのか？」がなされた。アベ・タッセ氏は講演でも触れていた通り、自身の長年にわたるソーシャルワークの国際組織での活動と、エチオピア出身で難民として移住した経験と、秋元樹弊所名誉所長を中心としたアジア国際社会福祉研究所の新刊「国際ソーシャルワーク 新たな概念構築」からの示唆を受けたものであり、講演の中で、「仏教ソーシャルワークというコンセプトが、これまで世界の主流とされているソ

#### 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所 第9回国際学術フォーラム

仏教ソーシャルワーク探求の旅、その先へ  
～なぜ世界は仏教ソーシャルワークを  
無視できないのか～

仏教ソーシャルワーク探求と国際ソーシャルワーク研究の交差  
新しいソーシャルワーク研究スチーゼル室に向けた第一歩

2025年2月15日(土)

午前10時～午後4時半

場所：淑徳大学東京キャンパス9号館にて

対象：社会福祉(ソーシャルワーク)研究者・教員・仏教関係者  
学生もご参加いただけます

\* オンライン配信あり(ZOOM)

\* 日英同時通訳付き・参加費無料

後援 日本ソーシャルワーク教育研究センター・国際社会福祉学会  
日本社会福祉教育学会 仏教社会福祉学会 仏教福祉・セラピー学会  
主催 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所 4420250205@shodai.ac.jp

本研究会(JRPS)研究費(23H09001)を助成を受けています



お申込は  
こちら！

ARI  
ISW

Designed by  
沼田百恵(総合社会学部心理学科)

ーシャルワークが前提としていた視点を、大きく覆す貢献をした」と述べた。休憩をはさんだ午後は、淑徳大学大学院総合福祉研究科郷堀ヨゼフ教授より「仏教ソーシャルワーク研究を通して見えてきたものとは？」を、研究所所長 戸塚法子教授からは「ソーシャルワークは仏教からなぜ目が離せないのだろうか」に関し、それぞれ発題がなされた。その後、アベ・タッセ氏のコメントを挟み、事前をお願いしていた龍谷大学の栗田修司教授、東北大学の井川裕覚博士より、コメントと刺激的な問題提起がなされた。終盤、オンライン、会場の参加者から活発な質問が寄せられ、登壇者とのやりとりがなされた。その後、松尾加奈上席研究員による全体のまとめが行われ、盛況のなかで終了した。

## 2 発表者

基調講演 アベ・タッセ教授 (国際ソーシャルワーク学校連盟 (IASSW) 元会長)

## 3 日程・スケジュール

2025年2月15日

10:00 開会式

- ・学長挨拶 山口 光治 淑徳大学 学長
- ・開会祝辞 (ビデオメッセージ) アントワネット・ロンバード  
プレトリア大学 教授、国際ソーシャルワーク学校連盟 (IASSW) 会長
- ・後援団体代表挨拶 栗田 修司 龍谷大学 教授  
日本仏教社会福祉学会 副代表理事

10:30 開催趣旨説明

- ～「仏教ソーシャルワーク探求の旅」途上の報告～  
藤森 雄介 淑徳大学 教授  
アジア仏教社会福祉学術交流センター センター長

11:00 基調講演

- Deglobalizing »International« Social Work?  
アベ・タッセ教授 国際ソーシャルワーク学校連盟 (IASSW) 元会長

12:15 基調講演に対する質疑応答

12:30 昼食休憩

13:30 ディスカッション

- ・～仏教ソーシャルワークの研究を通して見えてきたこと～  
郷堀 ヨゼフ 淑徳大学 大学院総合福祉研究科 教授
- ・～ソーシャルワークは仏教からなぜ目が離せないのだろうか～  
戸塚 法子 淑徳大学 教授 アジア国際社会福祉研究所 所長

14:30 コメント・登壇者への質問

- ・アベ・タッセ教授

15:00 休憩

15:15 指定発言

- ・栗田 修司 龍谷大学 教授
- ・井川 裕覚 東北大学 大学院 助教



- 15：25 質問への回答
- 15：45 ラウンドアップセッション  
・松尾 加奈 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所 研究員
- 16：00 閉会式  
・感謝盾贈呈 戸塚 法子所長  
・閉会挨拶 長谷川 匡俊 アジア国際社会福祉研究所 最高顧問  
大乗淑徳学園 理事長
- 16：30 解散
- 閉会后 交歓会  
淑徳大学東京キャンパス9号館2階ラウンジにて
- フォーラム全体進行役：アジア国際社会福祉研究所研究員 松尾 加奈

#### 4 総括(松尾 加奈記)

アジア国際社会福祉研究所が設立される前の2015年秋、第1回国際学術フォーラムは淑徳大学創立50周年記念事業として、アジア5か国から仏教徒や僧侶を招聘してそのソーシャルワークの代替機能である活動をテーマに開催された。2016年4月に研究所が開設されてからは、研究所の最も大きな事業の一つとして毎年コンスタントに開催されている。

2024年度の国際学術フォーラムのテーマについては、昨年度フォーラムに招聘したリン・ヒーリー(コネティカット大学名誉教授)のスピーチと、パナマでの再会と、研究所内の仏教ソーシャルワークと国際ソーシャルワーク研究のパワーバランスから着想を得た。

昨年度の年報記事にも書いた通り、キャサリン・ケンドール賞選考委員の一人でもあったヒーリー先生は、キャサリン・ケンドール賞受賞理由について、アジア国際社会福祉研究所が展開してきた事業の功績を列挙し、秋元名誉所長のイニシアチブを讃えた。「アジア国際社会福祉研究所の事業がなければ授賞はなかった、とまで思われる程に、である。」(松尾(2024)「総括」、アジア国際社会福祉研究所年報(8)、p48)

4月にパナマで開催された世界合同ソーシャルワーク会議では、ダブリン会議以来およそ6年ぶりに再会したアベ・タッセ先生のご厚意に甘えて、「世界の名だたるソーシャルワーク研究者が、仏教ソーシャルワークを『それはソーシャルワークではない』と言いつつ、無視できないのはなぜだろうか」という質問をぶつけ、長い時間にわたって議論させていただいた。タッセ先生もまた、アジア国際社会福祉研究所が世界のソーシャルワーク研究の中における重要な存在意義をもっていること、また既存のソーシャルワークとは異なる新しいコンセプトを出し世界と議論することの重要性を熱く語ってくださった。

折しも、研究所内では、仏教ソーシャルワーク学術探求シリーズが2024年3月に当初の予定通り刊行されたこと、また3年続けて国際ソーシャルワーク研究をテーマとして国際学術フォーラムが開催されたこと等から、2024年度は仏教ソーシャルワークをテーマにしたい、という声が上がっていた。

世界のソーシャルワーク教育の中心に30年以上もいらっしゃったアベ・タッセ先生を招聘できたのは、仏教ソーシャルワーク研究や国際ソーシャルワーク研究の根底にある「ソーシャルワークとは何か」を問い続ける研究所を彼が信頼してくれたからである。秋元名誉所長の書籍を読み込み、世界中を飛び回るスケジュールの合間を縫って来日、メッセージ性の高い『『国際』ソーシャルワークは脱グローバル化するのか』という講演で、彼は、またしても世界にさざ波を立てた。基調講演の後、ヒーリー先生を始め多数の著名な先生方から「タッセこそがふさわしかった。素晴らしかった」という声をたくさんいただいた。企画者の一員として大変有難く勇気を頂いた。

第9回国際学術フォーラムは、第1回以来、初めて淑徳大学の施設を利用し、またポスター作成にあたってはデザイン画のコンペを実施し、在校生がデザインした力強く華やかなデザインを採用、様々な場面で活用させていただいた。また、日本ソーシャルワーク教育学校連盟、日本社会福祉学会、日本ソーシャルワーク学会、日本仏教社会福祉学会、日本社会福祉教育学会の皆様には、広報において多大なご協力を賜った。研究所事務室職員の皆様には、専任研究員が一人になってしまった後の物理的・心理的な大きな支えとなっただけでなく、年度初めに想定していた以上に大変だったことは容易に想像できる。すべての方々の支えによって、国際学術フォーラムは新しいソーシャルワーク研究の扉を開き、新しい信頼を勝ち取り、ネットワークを広げることができたという点で、大成功を収めることができた。関係者の皆様のご厚意に深く感謝申し上げます。

コロナ禍を経てオーディエンス参加形態は大きく変容している。現地参加者が昨年よりも若干増えたものの、30名弱という点において費用対効果を問う声は厳しくなるだろう。一方で、アジア国際社会福祉研究所のメインイベントである国際学術フォーラムが、世界の信頼と期待の証となり、世界のソーシャルワーク研究者が、研究所を無視できなくなっている。嬉しいが、責任をどのように果たしていくかが大きな課題である。



## 10. 収集資料

- (1) 和書 —— 0冊 0円
- (2) 洋書 —— 0冊 0円

## 11. 広 報

### (1) 大学(研究所) HP

- 1 日本語版 <https://www.shukutoku.ac.jp/university/facilities/asiancenter/>
- 2 英語版 <https://www.shukutoku.ac.jp/en/about/facilities/asiancenter.html>

### (2) Facebook

- 1 日本語版 <https://www.facebook.com/ariiswjp/>
- 2 英語版 <https://www.facebook.com/ariisw.shukutoku/>

### (3) 動画 (YouTube) [https://www.youtube.com/playlist?list=UUF6h7wkpX2B\\_zQCS2XxU3HA](https://www.youtube.com/playlist?list=UUF6h7wkpX2B_zQCS2XxU3HA)

### (4) 「アジア国際社会福祉研究所 kara 通信」(広報誌リーフレット)

- No.61 2024年4月15日刊  
「ソーシャルワーク・教育・社会開発合同世界会議 (SWSD2024) への参加」  
～秋元名誉所長キャサリン・ケンダル賞授与式ほか～
- No.62 2024年6月1日刊  
「研究叢書シリーズ最終章」
- No.63 2024年10月31日刊  
「世界ソーシャルワーク・デイ記念イベント：インディジナス・ソーシャルワーク実践国際会議開催」
- No.64 2024年11月20日刊  
「新たな国際ソーシャルワーク理論構築へ」  
～International social work of all people in the whole world: a new construction 2<sup>nd</sup> edition 刊行～
- No.65 2024年12月19日刊  
「第9回国際学術フォーラムを開催します」  
～仏教ソーシャルワークその先へ なぜ世界は仏教ソーシャルワークを無視できないのか～
- No.66 2025年3月6日刊  
「第9回国際学術フォーラム開催報告：仏教ソーシャルワーク探求の旅、その先へ。  
～なぜ世界は仏教ソーシャルワークを無視できないのか～」

## 12. 経 費 (予算・決算)

事業行事名			(円)	(%)
	予算額	執行額	残高	執行率
論博プログラム費	2,700,000	108,440	2,591,560	4.0
研究所共同研究費	350,000	267,922	82,078	76.5
国際交流費	700,000	661,158	38,842	94.5
経営事務費	2,485,000	2,441,664	43,336	98.3
研究基盤形成検証強化費	800,000	749,589	50,411	93.7
アジア交流センター活動費	9,550,000	9,448,918	101,082	98.9
合 計	16,585,000	13,677,691	2,907,309	82.5

## 13. 資 料

(1) 出版物 \* (「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」助成 (2019年度まで))

- 1\* 「宗教とソーシャルワーク～仏教の場合～イスラム教の場合～」2016年9月 (文部科学省平成28年度助成) 日本社会事業大学主催・淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター共催「第24回環太平洋社会福祉セミナーアジア型ソーシャルワークを構築する」2015年12月12・13日の会議録の増し刷り
- 2\* Akimoto Tatsuru, sv. Fujioka Takashi, hd. Matsuo Kana, ed. Religion and Social Work: How Does Islamic “Social Work” Operate in Asia? March 2017. 日本社会事業大学との共同研究報告書 (文部科学省平成28年度助成)
- 3\* “How is Asian Buddhism Involved in People’s Life?” Shukutoku University 2nd International Academic Forum on Buddhist Social Work Program, March 2017 (文部科学省平成28年度助成)
- 4\* 「第2回淑徳大学 国際学術フォーラム 仏教ソーシャルワーク アジアの仏教は人びとの生活の問題

- にどうはたらくか」プレゼンテーション資料 2017年3月
- 5\* Akimoto Tatsuru, sv. Gohori Josef, and Etsuko Sakamoto, ed. How is Asian Buddhism Involved in People's Life? Shukutoku University 2nd International Academic Forum on Buddhist Social Work Proceedings, September 2017 (文部科学省平成29年度助成)
- 6\* 秋元樹監、郷堀ヨゼフ、佐藤成道編「第2回淑徳大学 国際学術フォーラム 仏教ソーシャルワーク：アジアの仏教は人びとの生活の問題にどうはたらくか—仏教ソーシャルワークの探求— —アジア仏教ソーシャルワーク研究ネットワークの形成—」報告書 2017年11月 (文部科学省平成29年度助成)
- 7\* Gohori Josef, Akimoto Tatsuru, Fujimori Yusuke, Kikuchi Yui, and Matsuo Kana, ed. From Western-rooted Professional Social Work to Buddhist Social Work: Exploring Buddhist Social Work (Research Series No.0), Gakubunsha, 2017 (文部科学省平成29年度助成)
- 8\* Nguyen Hoi Loan, ed. Vietnam Buddhism: From Charity to Buddhist Social Work: Exploring Buddhist Social Work (Research Series No.2), Gakubunsha, 2017 (文部科学省平成29年度助成)
- 9\* Gohori Josef, and Ogawa Hiroaki, ed. Growth of the Buddhist Social Work Activities in Mongolia (Research Series No.1), Gakubunsha, 2018 (文部科学省平成29年度助成)
- 10\* 西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ0号) 学文社 2018年3月 (文部科学省平成29年度助成) 著者：秋元樹、H.M.D.R. ヘラ (スリランカ)、石川到覚、N.H. ロアン (ベトナム)、S. オノパス (タイ)、K. サンボ (ネパール) 編者：郷堀ヨゼフ
- 11\* Demberel, Altaibaatar, Erdene, Ogawa, Gohori, ed. Growth of the Buddhist Social Work Activities in Mongolia (Series "Exploring Buddhist Social Work" No.1) ※モンゴル語
- 12\* Shibuya Satoshi, and Sanesathid, Outhoumphone, ed. The Current Situation of Buddhist Social Work in Lao PDR (Research Series No.3), Gakubunsha, 2018 (文部科学省平成30年度助成)
- 13\* Akimoto Tatsuru, and Hattori Maki, ed. Working Definition and Current Curricula of Buddhist Social Work, September 2018 (文部科学省平成30年度助成)
- 14\* モンゴルにおける仏教ソーシャルワークの誕生と成長～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ1号) 学文社 2018年10月 (文部科学省平成30年度助成) 編者：郷堀ヨゼフ、小川博章
- 15\* Batkhishig Adilbish, Bulgan Tumeekhuu, Bujinlkham Surenjav, Dagzmaa Baldoo, Demberel, Sukhbaatar, Tumennast Gelenkhuu, and Yanjinsuren, Sodnomdorj, ed. Development of the Asian Buddhist Social Work Activities, December 2018 (文部科学省平成30年度助成)
- 16 Matsuo Kana, Akimoto Tatsuru, and Hattori Maki, ed. What Should Curriculums for International Social Work Education Be? January 2019
- 17 松尾加奈、秋元樹、服部麻希編「第3回淑徳大学国際学術フォーラム 国際ソーシャルワーク教育のカリキュラムはいかにあるべきか」報告書 2019年3月
- 18\* ラオスにおける仏教ソーシャルワーク実践の概説～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ3号) 学文社 2019年2月 (文部科学省平成30年度助成) 著者：オートンフォン・サネサティッド、サイチャイ・シラデ、カンシング・シリパンヤ、ソンチャイ・ブリダン 編著：渋谷哲
- 19\* ベトナム仏教—慈善事業から仏教ソーシャルワークへ—～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ2号) 学文社 2019年3月 (文部科学省平成30年度助成) 著者：グエン・ホイ・ロアン、グエン・ティ・タイ・ラン、プイ・タイン・ミン、グエン・フウ・クアン、グエン・トゥ・トラン、ルオン・ビック・トゥイ 編者：グエン・ホイ・ロアン 和文編者：菊池結、郷堀ヨゼフ

- 20\* Matsusono Yuko, ed. Buddhist Social Work: Roots and Development of the Social Welfare System in Thailand (Research Series No.4), Gakubunsha, 2019 (文部科学省平成30年度助成)
- 21\* Shibuya Satoshi, ed. Buddhist Social Work in Lao PDR -research report-. July 2019. (文部科学省平成31年度助成)
- 22\* 郷堀ヨゼフ編「2018年度龍谷大学国際社会文化研究所・淑徳大学アジア国際社会福祉研究所共同研究シンポジウム開催事業 アジアの仏教ソーシャルワーク～日本が忘れてきたもの～」報告書 2019年10月 (文部科学省平成31年度助成)
- 23\* 「第4回国際学術フォーラム 仏教ソーシャルワーク 仏教ソーシャルワークの旅」プレゼンテーション資料 2019年12月 (文部科学省平成31年度助成)
- 24\* タイにおける社会福祉の起源と発展～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ4号) 学文社 2020年3月 (文部科学省2019年助成) 著者：ソパ・オノパス、プラマハ・スラカイ・チョンブンワット、安藤徳明 編者：松菌祐子
- 25\* Tatsuru Akimoto, ed. Buddhist Social Work in Sri Lanka Past and Present Exploring Buddhist Social Work (Research series No.5), Gakubunsha, 2020 (文部科学省2019年度助成)
- 26\* Mikako Inagaki, Koko Kikuchi, Josef Gohori, ed. Towards New Horizon Beyond the Buddhist Social Work: Exploring Buddhist Social Work (Research series No.6) Gakubunsha, 2020 (文部科学省2019年度助成)
- 27\* Gohori Josef, ed. The Journey of Buddhist Social Work～Exploring the Potential of Buddhism in Asian Social Work～March 2020 (文部科学省2019年度助成)
- 28\* Kana Matsuo, Tatsuru Akimoto, ed. Round-table Discussion on the Future of the IASSW ～What the IASSW Expects from Japanese Members and What Japanese Members Expect from the IASSW ～March 2020 (文部科学省2019年助成)
- 29\* Tatsuru Akimoto, ed. The Next Action Based on the Working Definition of Buddhist Social Work and Beyond-Theory Research, Education, and Practice March 2020 (文部科学省2019年助成)
- 30\* 東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社等)との連携に関するアンケート調査 報告書 2020年3月 (文部科学省2019年度助成)
- 31\* アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性に関する総合的研究 研究成果報告書 2020年5月
- 32 Tatsuru Akimoto, Yuki Someya ed. What Buddhist Social Work Can Do While Western-rooted Professional Social Work Cannot October 2020
- 33 スリランカにおける仏教ソーシャルワーク～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ5号) 学文社 2021年3月 著者：オーマルペー・ソーマーナンダ、H.M.D.Rヘラ、アヌラダ・ウィクラマシンハ、ペピリヤーワラ・ナーラダ、バムヌガマ・シャーンタウィマラ 編者：東田全央
- 34 境界線を越える世界に向けて一広がる仏教ソーシャルワークの可能性―～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ6号) 学文社 2021年3月 著者：稲垣美加子、菊池幸工、郷堀ヨゼフ 編者：郷堀ヨゼフ
- 35 東アジアにおける仏教ソーシャルワーク―中国仏教・台湾仏教編―～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ7号) 学文社 2021年3月 著者：塩入法道、郭娟、韓曉燕、金潔、新保祐光、石川到覚、依来法師、吉水岳彦 編者：藤森雄介
- 36 THE VISITING RESEARCHER FELLOWSHIP (ROMPAKU) PROGRAM LEADING TO A Ph.D. FIVE-YEAR PROGRESS REPORT ( APRIL2016-MARCH2021) 2021年3月

- 37 ソーシャルワークのグローバリゼーションに世界のソーシャルワーク研究者は抗う～脱植民地化・土着化・スピリチュアリティ・仏教ソーシャルワーク～  
Social Work Academics Resisting the Globalization of Western-rooted Social Work  
Josef Gohori, Yuki Someya, ed. August 2021
- 38 Josef Gohori, Fujimori Yusuke ed. Buddhist Social Work in East Asia: Chinese Buddhism and Taiwanese Buddhism (Research Series No.7) Gakubunsha, March 2022
- 39 Josef Gohori, Kana Matsuo ed. Buddhism and Social Work in Cambodia and Myanmar (Research Series No.8) Gakubunsha, March 2022
- 40 International Conference Open Mind Mongolia 2021 “Supporting Social Well-being during and after Covid-19” PROCEEDINGS OF THE BUDDHIST SOCIAL WORK SESSION, March 2022
- 41 国際ソーシャルワークを実践家の声から問う アジア国際社会福祉研究会調査報告書 編者：東田全央、松尾加奈、原島博 2023年3月
- 42 東南アジアにおける仏教とソーシャルワーク—カンボジア・ミャンマー編— ～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ8号) 学文社 2023年3月 編著者：松尾 加奈、郷堀 ヨゼフ 著者：ボラ・チュン、キオ・ヴィチット、H.ワン・ゴー、スオン・サン、ボビー、チャー・シッ・ナイン、イ・イ・ピュー、サー・ウーセン、山口 光治
- 43 “SOCIAL WORK” NEEDS AND “SOCIAL WORK” PROVIDERS RESEARCH PROJECT  
HOW DOES “SOCIAL WORK” FUNCTION IN THE COMMUNITIES WITHOUT THE PROFESSIONAL SOCIAL WORKERS? Kana Matsuo, Yuki Someya ed. March 2023
- 44 Josef Gohori ed. Buddhism and Social Work in Nepal and Bhutan (Research Series No.9) Gakubunsha, March 2023
- 45 歴史・教育・実践から仏教ソーシャルワークをひも解く オンラインセミナー報告書  
編者：郷堀ヨゼフ 2023年10月
- 46 「第6回淑徳大学アジア国際社会福祉研究所国際学術フォーラム報告書」  
What is the International Social Work with the Globalized States-Social Work? February 2022  
グローバル化する国内社会福祉にあって何が国際ソーシャルワークなのか? Kana Matsuo, Yuki Someya ed. 2023年10月
- 47 「第7回淑徳大学アジア国際社会福祉研究所国際学術フォーラム報告書」  
What Does International Social Work Comprise and How Should This be Presented in the Social Work Curricula? 国際ソーシャルワーク教育は、何を教えているのか? 何を教えるべきなのか?  
Coordinated by Kana Matsuo (松尾加奈) Edited by Masateru Higashida (東田全央) 2023年10月
- 48 International Social Work of all People of the World  
Published by Junposha Author : Tatsuru Akimoto, January 2024
- 49 International Conference OPEN MIND MONGOLIA 2023 Policy and practice in disability and development towards inclusive social change: Implications for social work  
Editors: Masateru Higashida, Oyuntsetseg Dugarsuren, February 2024
- 50 ネパールとブータンにおける仏教とソーシャルワーク～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズNo.9) 学文社 2024年3月 編者：郷堀ヨゼフ、佐藤成道
- 51 Buddhist Social Work in East Asia: South Korea and Japan ～Exploring Buddhist Social Work～ (Research Series No.10) Gakubunsha, March 2024, Edited by Yusuke Fujimori, Josef Gohori

- 52 東アジアにおける仏教とソーシャルワーク—韓国・日本— ～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズNo.10) 学文社 2024年3月 編者：藤森雄介、郷堀ヨゼフ
- 53 Exploring Alternative Social Work Knowledge-Based on the Narratives of Practitioners from Sri Lanka  
東田全央/Shamini Attanayake 2024年7月
- 54 International Social Work of All People in the Whole World A New Construction Second Edition  
編者：秋元 樹/東田全央/松尾加奈 2024年10月
- 55 国際ソーシャルワーク新たな概念構築  
編者：東田全央/秋元樹/松尾加奈 2025年3月
- 56 仏教ソーシャルワーク・オンラインセミナー資料集
- 1 Exploring Buddhist Social Work Through the Lens of History, Education, and Practice: Mongolia  
2024年11月
  - 2 Buddhism meets SDGs workshop 2024年11月
- 57 「第8回淑徳大学アジア国際社会福祉研究所国際学術フォーラム報告書」  
International Social Work Beyond Its Centennial Anniversary: Theory Debate (Disappearance or Expansion, Reform or New Construction?) February 2025  
Edited by Kana Matsuo (松尾加奈)

## (2) 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所関係規程類

### 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所規程

#### (目的)

第1条 この規定は淑徳大学学則第7条第2項に基づき、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所（以下「研究所」という。）に関し必要な事項を定める。

#### (研究所の目的)

第2条 研究所は、アジア及び世界における国際社会福祉研究の向上に寄与するとともに、研究成果の社会還元を目的とする。

#### (事業)

第3条 研究所は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 アジアを中心とする国際的な社会福祉・ソーシャルワークに関する調査及び研究
- 2 アジアにおける仏教社会福祉・ソーシャルワークに関する調査及び研究
- 3 その他研究所の目的を達成するために必要な事業

#### (アジア仏教社会福祉学術交流センター)

第4条 研究所に前条第2号に定める業務を行うためアジア仏教社会福祉学術交流センター（以下「センター」という。）を置く。

#### (構成)

第5条 研究所に次の所員を置く。

- 1 所長
- 2 センター長
- 3 研究員

2 所長は、研究所の代表として所務を統括する。

3 センター長は、センターの代表として所務を統括する。

#### (顧問)

第6条 学長は、必要に応じて研究所に最高顧問及び顧問を置くことができる。最高顧問は、研究所の管理運営及び研究その他活動について意見を述べることができる、また、顧問は、所長の諮問に対し意見を述べることができる。

#### (研究所運営委員会)

第7条 研究所に研究所運営委員会を設置する。

2 研究所運営委員会に関する事項は、別に定める。

#### (所長の選任、任命及び任期)

第8条 所長は、大学人事委員会の議を経て学長が選任し、理事長がこれを任命する。所長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

#### (センター長の選任、任命及び任期)

第9条 センター長の選任は、研究所運営委員会の推薦を得て、学長が委嘱する。センター長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

#### (研究員の選任、任命・委嘱及び任期)

第10条 研究員の選任、任命・委嘱及び任期は、次のとおりとする。

(1) 専任研究員は、研究所運営委員会の推薦を得て、大学人事委員会の議を経て学長が選任し、理事長が任命する。

2 兼担研究員の選任は、本学専任教員の中から研究所運営委員会の推薦により、所属学部長の了解を得て、学長が委嘱する。兼担研究員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

3 兼任研究員の選任は、学外の研究者の中から研究所運営委員会の推薦により、学長が委嘱する。兼任研究員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 研究員の研究所における資格、職務、職名等については、別に定める。

(事務)

第11条 事務は、研究所事務局がこれを担当する。

(規程の改定)

第12条 この規程の改正は、大学協議会の議を経て、学長が決定する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

## 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所運営委員会規程

### (目的)

第1条 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所規程第7条第2項に基づき、アジア国際社会福祉研究所運営委員会(以下「委員会」という。)に関し必要な事項を定める。

### (委員会の目的)

第2条 委員会は、研究所の運営の適正と充実を図ることを目的とする。

### (審議事項)

第3条 委員会は、次の事項を審議する。

- 1 研究所の施設、運営及び事業計画に関する事項
- 2 研究所の予算及び決算案に関する事項
- 3 その他研究所運営に関して必要と認められた事項

### (構成)

第4条 委員会は、委員長、副委員長及び委員で構成する。

### (委員の選任)

第5条 委員長、副委員長及び委員の選任は、研究所の所長が推薦した者から、学長が委嘱する。

### (任期)

第6条 運営委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

### (委員会の招集)

第7条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。委員長に事故があるときは、副委員長がこれに代わる。

2 委員会は、定例又は臨時にこれを招集する。

### (事務)

第8条 委員会に関する事務は、研究所事務局がこれを担当する。

### (規程の改定)

第9条 この規程の改正は、大学協議会の議を経て、学長が決定する。

## 附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

## 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所研究員規程

### (目的)

第1条 この規程は、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所規程第10条第2項に基づき、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所（以下「研究所」という。）の研究員の資格、職務、職名等について定める。

### (専任研究員)

第2条 研究所所属の専任研究員（以下「研究所教員」という。）は、次の基準を満たす者とする。

- 1 国際社会福祉・ソーシャルワーク又は仏教社会福祉・ソーシャルワークにおける研究・実践実績
  - 2 国際共同調査研究のプロジェクト・マネジメント力と実績
  - 3 国際共同調査研究以外の研究所業務・活動（国際共同調査研究、国際会議（ワークショップ、セミナー、フォーラム等）の開催、出版、資料の収集、人材養成、海外大学等との協働、国際ソーシャルワーク組織への協力、海外研究者及び大学等との交流、研究会の開催・組織その他）の経験と遂行能力
  - 4 研究所の管理運営
- 2 研究所教員の職名は、研究所教授、研究所准教授及び研究所助教とする。
- 3 研究所教員の職位は、研究所運営委員会の推薦を得て、大学人事委員会の議を経て、理事長が任命する。資格及び職位の判定基準は、別に定める。

### (兼担研究員及び兼任研究員)

第3条 兼担研究員及び兼任研究員は、研究所からの委託を受けた特定の調査研究又は研究所の目的を達成するために必要な業務及び活動を行う。研究所職名は、研究所研究員、研究所研究員補及び研究所訪問研究員とする。

- 2 兼任研究員のうち研究所研究員及び研究所研究員補は、博士後期課程を修了又は在学中の者、それに相当する者又はそれに相当する実践・実務経験を持つ者とする。その資格、職務内容等は、別に定める。
- 3 前項にいう研究所研究員及び研究所研究員補は、研究所運営委員会の推薦を得て、学長が委嘱する。
- 4 兼任研究員のうち研究所訪問研究員は、海外からのサバティカルその他の訪問者及び所属研究機関を持たない国内博士後期課程修了者又は在学中のもの又はそれに相当する者とし、研究所運営委員会の推薦を得て、学長が決定する。研究所訪問研究員は、研究所共同調査研究やその他の研究所業務に従事する義務を必ずしも負わず、研究の足場を提供されるものとする。その職務内容等は、別に定める。

### (規程の改定)

第4条 この規程の改正は、大学協議会の議を経て、学長が決定する。

### 附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

### 附 則

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所  
専任研究員の資格並びに研究所職位の判定基準に関する内規

(目的)

第1条 この内規は、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所研究員規程第2条第3項に基づき、専任研究員の資格並びに職位の判定基準について定める。

(資格)

第2条 専任研究員が有すべき資格は、次のとおりとする。

- 1 特定の国、国民、人種、民族等に特別の優位又は劣位の価値観を有さないこと。
- 2 原則として博士の学位を持つ者。国際社会福祉・ソーシャルワークを専門とする者についてはMSW(社会福祉修士; Master of Social Work)を有すること。
- 3 日本語及び英語を用い職務を遂行する能力を一定程度持つこと。
- 4 2年以上の海外留学、勤務、滞在の経験及び2年以上の国内実務経験を有すること又はそれに相当する経歴を有すること。
- 5 海外出張等の任に堪え得ること。
- 6 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所研究員規程第2条第1項に示した基準に関して強い関心を持ち、かつ、優れた遂行能力を有すること。

(研究所教授)

第3条 研究所教授の職位判定基準は、次のとおりとする。

- 1 国際ソーシャルワーク又はアジア仏教社会福祉のいずれかの分野において深い理解と多くの国際共同研究の経験を持ち、他方の分野についても一定程度の理解と深い敬意を持つこと。
- 2 国際共同調査研究の経験を相当に持つとともに、独立して、自ら、特定の国際共同調査研究(プロジェクト)を企画・設計し、コーディネーター又はリーダーとしてチームを編成し、管理運営しつつ実施し、成果をまとめることができ、深刻なトラブルや緊急事態にも適切に対処できること。
- 3 国際共同研究以外の淑徳大学アジア国際社会福祉研究所規程第3条にいう研究所の事業のほとんどにおいて相当の経験を有し、いずれの業務又は活動にも従事できるとともに、深刻なトラブルや緊急事態にも適切に対処できること。
- 4 研究所職務の遂行及び運営に当たっては、国際ソーシャルワーク又はアジア仏教社会福祉の双方に常に目を向けていることができるのみならず、国際ソーシャルワーク又はアジア仏教社会福祉のいずれかの分野において研究所の行う国際共同調査研究の全貌を把握し、企画・設計及び運営ができること。また、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所規程第2条にいう研究所の目的を視野に入れて研究所全体の管理運営に貢献することが出来ること。

(研究所准教授)

第4条 研究所准教授の職位判定基準は次のとおりとする。

- 1 国際ソーシャルワーク又はアジア仏教社会福祉のいずれかの分野において相当に精通し、他方の分野にも興味を持ちかつ目を配ることができること。
- 2 国際共同調査研究の経験を相当に持つとともに、独立して、自ら、特定の国際共同調査研究(プロジェクト)を企画・設計し、コーディネーター又はリーダーとしてチームを編成し、管理運営しつつ実施し、成果をまとめることができること。
- 3 国際共同研究以外の淑徳大学アジア国際社会福祉研究所規程第3条にいう研究所の事業のいくつかにおいて相当の経験を有し、例外を除き全ての業務又は活動に従事できること。

- 4 研究所職務の遂行及び運営に当たっては、全ての業務又は活動を視野に研究所全体の管理運営に関心を持ち、ある程度貢献することができること。

(研究所助教)

第5条 研究所助教の職位判定基準は、次のとおりとする。

- 1 国際ソーシャルワーク、アジア仏教社会福祉のいずれかに一定の業績を持つこと。
- 2 独立して、自らの調査研究を企画・設計、実施及びまとめができ、その経験を持つこと。国際調査研究の経験を少なくとも1回以上持つこと又はそれに相当する経験を有すること。また、国際共同調査研究に興味を持ち、チームの一員として特定の国際共同調査研究を行うことができること。
- 3 国際共同研究以外の淑徳大学アジア国際社会福祉研究所規程第3条にいう研究所の事業のいずれかにおいて一定の経験を有するとともに、例外を除き全ての業務又は活動に従事できること。
- 4 研究所の全業務及び活動をみわたせ、研究所の発展に関心を持つこと。

附 則

この内規は、平成28年4月1日から施行する。

## 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所

### 兼任研究員の研究所研究員及び研究所研究員補の資格、職務内容等に関する内規

#### (目的)

第1条 この内規は、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所研究員規程第3条第2項に基づき、兼任研究員の研究所研究員及び研究所研究員補の資格、職務内容等について定める。

#### (研究所研究員及び研究所研究員補の資格、職務内容等)

第2条 兼任研究員の研究所研究員及び研究所研究員補の資格、職務内容等は、次のとおりとする。

- 1 国際ソーシャルワーク、アジア仏教社会福祉のいずれかに興味を持つこと。
- 2 国際共同調査研究又は淑徳大学アジア国際社会福祉研究所規程第3条にいう研究所の事業に興味を持ち、研究所の委嘱を受け特定の国際共同調査研究又は研究所の事業に従事することができること。
- 3 研究員補は、研究員等の具体的指示及びアドバイスを受けて、チームの一員として特定の国際共同調査研究又は研究所の事業に従事することができること。

#### 附 則

この内規は、平成28年4月1日から施行する。

## 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所

### 訪問研究員の職務内容等に関する内規

#### (目的)

第1条 この内規は、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所研究員規程第3条第4項に基づき、アジア国際社会福祉研究所（以下「研究所」という。）訪問研究員の職務内容、待遇等について定める。

#### (職務内容)

第2条 研究所訪問研究員（以下「訪問研究員」という。）の職務内容は次の通りとする。

- 1 各自の従事する調査研究に真摯に取り組む。
- 2 研究所が開催する研究会等に参加する。
- 3 それぞれの機会を促え、研究所の存在、意義、活動を学内外に広め、研究所の将来の成長に寄与する。

#### (待遇等)

第3条 訪問研究員の賃金・給与、施設設備等の供与は以下の通りとする。ただし、「ビジティング・リサーチャー論博プログラム（奨学金付き）」参加の訪問研究員については、別に定める「淑徳大学アジア国際社会福祉研究所ビジティング・リサーチャー論博プログラム（奨学金付き）規程」によるものとする。

- 1 訪問研究員は無給とする。
- 2 訪問研究員は研究所が研究上必要と認める範囲内で、施設設備等を利用することができる。

#### 附 則

この内規は、平成31年4月1日から施行する。

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所  
ビジティング・リサーチャー論博プログラム(奨学金付き)規程

(目的)

第1条 この規程は、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所(以下「研究所」という。)ビジティング・リサーチャー論博プログラム(奨学金付き)(以下「プログラム」という。)に関する必要事項を定める。

(内容)

第2条 アジア諸国のソーシャルワーク教員・研究者及びソーシャルワークコミュニティのリーダーの人材養成に貢献するために、アジア諸国の主に大学(Schools of Social Work)に所属する教員・研究者を奨学金付きでビジティング・リサーチャー(以下「リサーチャー」という)として研究所に迎え、日本の論文博士制度によりPh.D.取得の機会を提供する。

(リサーチャー)

第3条 リサーチャーを公募する。

2 定員は年間1名とし、受入期間は3年以内とする。日本滞在期間は2年以内とする。

3 選考は、ビジティング・リサーチャー論博プログラム(奨学金付き)選考委員会(以下「委員会」という。)で選考し、学長が決定する。委員会に関する規程は、別に定める。

4 リサーチャーとして滞在期間中は、次の経費を支給する。

1 居住地との往復エコノミー航空券(片道×2)及び来日準備金5万円

2 滞在期間中の住居費(上限7万円)

3 生活及び研究のための奨学金(20万円/月)

5 学位請求論文提出及び審査を受ける期間中は、次の経費を支給する。

1 学位請求論文提出時の論文要旨等日本語翻訳を他に依頼する場合には、翻訳料(上限20万円)

2 最終試験、学力の確認、学位授与の際の渡航旅費(居住地との往復エコノミー航空券及び日本国内交通費及び宿泊費実費)

6 リサーチャーに対して、論文博士を取得するために必要なコースの一部または全部を提供する。コースの内容は、別表に定める。

7 リサーチャーに関するその他の事項は、別に定める。

(学位論文提出候補者の推薦・学位)

第4条 リサーチャーは、淑徳大学(以下「本学」という。)大学院総合福祉研究科への学位請求論文提出に当たって研究所の推薦を得るためには次の条件を満たさなければならない。

1 学位請求論文が一定の研究水準に達していること。

2 第3条第6項で提供するコースを全て履修し、修了していること

2 前項の条件を充足した者には、本学大学院総合福祉研究科に、博士(社会福祉学)の学位請求論文の提出候補者として推薦を行う。

(招聘講師)

第5条 研究所は、リサーチャーに対しコースの指導をするために講師を招聘(へい)する。

2 招聘講師(以下「講師」という)は、本プログラムの趣旨を理解し、かつ、各担当コース分野において優れた能力と実績を備えたものとする。

3 講師は、原則として学内及び国内外の大学教員の中から研究所が推薦し、学長が委託する。

4 講師の委託期間は、業務委託契約書の有効期間に準ずる。ただし、再業務委託を妨げない。

5 講師には、所定の謝礼その他必要な費用を支払うものとする。

- 1 原則として居住地との往復エコノミー航空券（その他の諸経費を含む。）及び日本国内交通費実費
- 2 宿泊費1日12,000円（上限）、10日間（上限）の実費
- 3 コース指導謝礼1コースあたり30万円（税別）
- 6 学長は、講師に事故その他業務委託を継続し難い事由があると認めたときは、任期中にあってもこれを取り消すことができる。
- 7 講師の謝礼以外に経費が生じた場合は、研究所が負担する場合がある。

（アドバイザー）

- 第6条 研究所は、プログラムの実施及び運営に関し、アドバイスを得るためにアドバイザーを委嘱する。
- 2 アドバイザーは、本プログラムの趣旨を理解し、かつ、国際社会福祉または仏教ソーシャルワーク分野においてすぐれた能力と実績を備えるものとする。
  - 3 アドバイザーは、原則として学内および国内外の大学教員の中から研究所が推薦し学長が委嘱する。
  - 4 委嘱期間は1年とする。ただし、再委嘱を妨げない。
  - 5 学長は、アドバイザーに事故その他委嘱を継続しがたい事由があると認めたときは、任期途中にあってもこれを取り消すことができる。
  - 6 アドバイザーに関わる経費が生じた場合は、研究所が負担する場合がある。

（その他）

第7条 この規程の実施のために、必要がある事項については、学長がその都度決定する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

別表（第3条関係）

調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査
調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査
事業計画・管理・評価調査
論文作成指導
国際社会福祉／ソーシャルワーク
日本語と日本文化
ソーシャルワーク原論
特別講義・セミナー

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所  
ビジティング・リサーチャー（奨学金付き）に関する細則

（目的）

第1条 この細則は、ビジティング・リサーチャー論博プログラム（奨学金付き）規程（以下「規程」という。）第3条第7項に基づき、ビジティング・リサーチャー（以下「リサーチャー」という。）に関する事項について定める。

（応募資格）

第2条 リサーチャーに応募しようとする者は、次の各号に該当するものでなければならない。

- 1 修士の学位を授与された者。MSW (Master of Social Work) をもつことが望ましい。
- 2 研究論文分野が、国際社会福祉または仏教ソーシャルワークであること
- 3 博士論文のテーマ、枠組み、構想が既にできており、受入期間内に論文提出が確実に可能であること。
- 4 規程別表第1の淑徳大学アジア国際社会福祉研究所（以下「研究所」という。）が提供するコースを履修し、かつ理解できること。
- 5 日本国籍を有せず、かつ応募時に自国に実際に居住している者
- 6 研究能力、人柄及び英語能力の保証を含んだ推薦状3通とし、うち1通は所属機関（大学若しくは学部又は所属組織）からの次の内容を含むものとする。
  - 1 リサーチャーとして日本滞在期間中、所属機関等の一切の職務又は業務から解放され、論文執筆に専念できること。
  - 2 帰国後の復職及び身分保障がなされていること。

（出願）

第3条 リサーチャーに応募しようとする者は、所定の願書に前条第6号の書類を添付して指定期日までに研究所に願い出なければならない。

（選考基準）

第4条 選考の基準は第2条の要件に加え、提出された研究計画及び研究業績の内容、レベル並びにその準備進捗度合いによる。その内容、レベル及び準備進捗度合いが同等である場合には、次の優先順位が適用される。

- ア アジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟 (Asian and Pacific Association for Social Work Education : APASWE) の加盟校の教員
- イ その連盟に属さないソーシャルワーク関連大学または学部 (school) の教員
- ウ 上記ア又はイのいずれにも属さない研究者

（受入時期）

第5条 リサーチャーの研究所受入時期は、原則として10月1日とする。

（コース）

第6条 コースの実施責任者は、研究所専任研究員が担う。

- 2 コースの指導は招聘（しょうへい）講師が行う。
- 3 コースの指導は、原則として「オンライン」で実施する。
- 4 各コースの修了者には、コースごとに研究所長名の修了書 (certificate) を発行する。
- 5 コースは原則として英語で実施する。

（日本に滞在していない期間の取扱い）

第7条 リサーチャーが、調査等の理由により日本を離れる場合の航空券等の旅費その他の諸経費は支給さ

れない。また、そのために2週間以上日本を離れる場合、当該月の生活及び研究のための奨学金は日割りで支給する。

2 受入期間内に日本を離れる場合は、事前に所定の書式を用いて研究所所長に願い出なければならない。  
(奨学金の支給停止)

第8条 リサーチャーが次の各号の一つに該当すると研究所所長が認めた場合は、奨学金の受給資格を失う。

- 1 病気、家庭の事情、研究意欲の喪失その他により日本滞在又は研究執筆継続が不可能となったとき。
- 2 真摯な研究執筆活動が継続していないと認められるとき。
- 3 受入期間以内の論文完成が不可能と認められるとき。
- 4 淑徳大学及び研究所への信義則に反した行為があったと認められるとき。
- 5 申請書類に虚偽の記載があることが判明したとき。
- 6 日本の法令等に違反したとき。
- 7 出入国管理及び難民認定法別表第1の4に定める在留資格を失ったとき。
- 8 他の奨学金の支給を受けたとき。
- 9 その他リサーチャーとして不適当と認められるとき。

(返還)

第9条 受給資格を失った場合は、既に支給された生活及び研究のための奨学金を次の算定方法により返還しなければいけない。

返還額 = 奨学金 × (受給資格喪失と判断された日から月末までの日数 / 当該月の日数)

(その他の経費の支給)

第10条 リサーチャーの諸行事、文化活動及びアテンドに関わる諸経費が生じた場合は、別途研究所が負担する場合がある。

附 則

この細則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この細則は、平成31年4月1日から施行する。

## 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所

### ビジティング・リサーチャー論博プログラム（奨学金付き）選考委員会規程

#### （目的）

第1条 この規程は、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所ビジティング・リサーチャー論博プログラム（奨学金付き）規程第3条第3項に基づき設置するビジティング・リサーチャー論博プログラム（奨学金付き）選考委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営方法等に関し、必要な事項を定めることを目的とする。

#### （役割）

第2条 委員会は、研究所長の諮問に応じて、ビジティング・リサーチャーの選考を行う。

#### （委員）

第3条 委員は、研究所運営委員会の議決を経て研究所長が委嘱する。

2 委員の数は3名以上5名以内とする。

3 委員は、淑徳大学大学院総合福祉研究科から1名以上、研究所から1名以上、研究所顧問から1名以上とする。なお、必要により専門的知見を有する者1名以上を加えることができる。

4 委員の委嘱期間は、1年間とする。ただし、再委嘱を妨げない。

5 委員は、辞任又は任期満了後でも、後任者が就任するまでは、前任の委員が、その職務を継続して執行する。

#### （委員長）

第4条 委員会に委員長を1人置く。

2 委員長は、委員の中から互選により選出する。

3 委員長は、会議の議長となり、委員会の審議の経過および結果について研究所長に報告する。

4 委員長が欠け、又は事故があるときは、あらかじめ指名された委員が、その職務を行い、又は代理する。

#### （会議の招集）

第5条 委員会は、必要に応じて随時、委員長が招集する。

#### （定足数）

第6条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

#### （議決）

第7条 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

#### （書面表決）

第8条 やむを得ない理由のため、委員会に出席できない委員は、あらかじめ通知された事項について、書面をもって表決することができる。

2 前項の場合において、当該委員は、委員会に出席し、かつ、議決したものとみなす。

#### （委員以外の出席）

第9条 委員長は、必要があると認めるときは、委員会の同意を得て委員以外の出席を求め、その意見を聞くことができる。

#### （委員の機密保持）

第10条 委員は、審議の経過及び結果については秘密を守らなければならない。

#### （議事録）

第11条 委員会の議事については、その経過の要領及び結果を記録した議事録を作成する。

2 議事録には、議長が署名、捺印するものとする。

(事務)

第12条 委員会の事務は、アジア国際社会福祉研究所が行う。

(その他)

第13条 この規程の実施について必要な事項は、別に委員会が定める。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

*If at first the idea is not absurd, then there is no hope for it.*

— *Albert Einstein*

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所年報

アジア仏教社会福祉学術交流センター

第9号 2024年度

---

発行日 2025年10月31日  
編集担当者 染谷有紀  
編集責任者 中西規之  
発行責任者 戸塚法子  
発行者 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所  
〒260-8701 千葉市中央区大巖寺町200  
TEL 043-265-9879 FAX 043-265-7339  
E-mail: asiainst@soc.shukutoku.ac.jp  
印刷所 株式会社白鷗社  
〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-14-10

ISSN 2433-9415



